3-2 大型菌類
（きのこ類）

スナヤマチャワンタケ　2015 年 11 月 7 日　富津市

1 千葉県の大型菌類

菌類フロラの調査は、欧米等の一部を除き地球レベルで全く不十分であり、日本産大型菌類（きのこ類）の調査においても現在約 3 分の 1 が目録化された段階と考えられている。千葉県立中央博物館（以下、千葉県博）が設立される以前の千葉県における大型菌類調査はほとんど行われず標本も組織的には残されてこなかった（吹春ほか 1995）。このため 1989 年に機関設置後、開館した千葉県博が、本格的な調査「房総の自然誌―大型菌類誌―」を開始し、その後の約 30 年間の活動で収集された千葉県博所蔵の記録・標本類が、千葉県産大型菌類相を知るためのほとんど唯一の手がかりである。

千葉県博による調査活動の結果、千葉県産大型菌類（きのこ類）情報 26,936 件（目撃情報・未同定標本を含む、うち標本情報 19,473 点、同定済標本情報 12,496 点、2022 年 3 月末時点）が収集され、千葉県産として 708 種類（担子菌類 216 属 632 種 8 変種 4 品種：子嚢菌類 43 属 64 種）が同定されている（吹春ほか 2022）。その詳細については『千葉県菌類誌』の目録（吹春ほか 1995, 2002; 長尾・吹春 2002; Kasuya 2004; Kasuya and Katsumoto 2006; Fukiharu et al 2006）、県内各地の目録（吹春ほか 1994；吹春・腰野 1994, 2000；腰野 1997b；腰野・吹春 1997）、生育状況等については千葉県史（吹春 1996, 1998a, b, c, 2004a, 2005a, b, c；吹春・腰野 2005）やレッドリスト（1999a, 2004b, 2009d）等に紹介されてきた。

本来ならば、県内の大型菌類の状況について、県内全域の発生状況を分類群にかたよらず把握した上で、個体群や生育地が減少しつつある保護の必要性のある種を選定すべきである。しかし県内の状況については、次のような理由で真の発生・分布情報の把握が困難である。（1）ほとんどの菌種の調査履歴が千葉県博の歴史とほぼ同じ約 30 年という短期の記録を基にしたものであること。（2）千葉県博に収集された情報は県内全域をくまなく調査したものでなくスポット的な発生情報であること。（3）大型菌類は常に地上に子実体を出しているものはほとんど無く、ある季節に偶然子実体を発生させてはじめて生息が知られることになり、生息状況の把握が非常に困難であること。以上のような理由により、県内全域の全ての菌種についての状況把握は困難である現況であるため、絶滅に瀕する種の選定にあたっては人為的ではあるが次のような方法に基づき選定をおこなった。

大型菌類はブナ科、マツ科、カバノキ科などと外生菌根菌をつくり共生する種も多く、植物群落の生育状況に依存したものも多い。また腐生的な生活をするものであっても、特定の植物群落の中でのみ生育可能なものも多く考えられる。そのため、（1）千葉県の菌類相を代表する種であり、かつ特定の植物群落と密接な関係をもち、その植物群落の存続が危機に瀕していると考えられる種類について、保護の必要性の観点から選定の対象とした。このために「菌根景観論」（吹春 2003, 2005a, 2007）という考え方を導入し、記録期間の短さを補った。（2）次に千葉県の菌類相を知る上で重要な要素であると思われる種であり、かつ発生例が極めて希なものを選定の対象とした。

また現在、環境省が定量的な数値データに基づく絶滅危惧種選定・評価作業をすすめており、千葉県としても環境省のカテゴリーと比較しやすいよう、また定量的要件においても比較できるよう基準等を考慮した。

2 評価対象種

（1）評価対象

- 選定対象とした大型菌類とは、担子菌門、子嚢菌門に属し、肉眼で認められる大きさの子実体を形成するもの（きのこ類）。
- ハラタケ目やイグチ目の大型担子菌類、また大型の子実体を形成する子嚢菌類など、調査がある程度進んでいるグループを中心に選定した。
- 評価対象とする単位は、種、亜種、変種、品種とした。
- 証拠標本が明らかなもの（県立中央博に標本を収蔵）を対象とした。

（2）対象外

- 県外・国外からの外来種と想定されるものは対象とせず、千葉県の在来種と考えられるものを選定した。
- 顕微鏡レベルの子実体を形成するもの（かび類）は対象としなかった。

3 選定基準及び方法

今回選定した絶滅危惧種の大半は外生菌根菌として特定の植物群落にその生存を依存しており、その依存する植物群落の生育状況が菌類群集の生存を左右する。県内の消滅しつつある重要な植物群落としてはシイ・カシの照葉樹林（吹春 1998a, 2019, 2020）、イヌシデ・コナラの落葉樹林（吹春 1998a, 2018）、海岸や内陸のマツ林（吹春 2017, 2021a）、丘陵地の尾根に生育するモミ林（吹春 2005b, 2021a）を主要なものと考えた。また急速に消滅しつつある環境として砂質の自然海岸（吹春 2022b）がある。このような環境に依存する種類を選定した。

（1）シイ・カシ類との共生種：シイ・カシの照葉樹林は、かつて房総半島を広く覆っていたと考えられる群落で、千葉県の最も重要な植物群落と考えられる。大型のきのこをつくる担子菌類や子嚢菌類の中には、かつてこの群落が中国南部を中心とする東アジアで多様化を果たした時、共生する大型菌類も、ともに共進化・多様化し、ヒ

マラヤ・中国南部・東アジア熱帯島嶼高地・西日本から関東地方低地に分布域を広げたと考えられており、それらの外生菌根菌類は「東南アジア要素」とよばれている（本郷 1978；吹春 2009b)。このシイ・カシの樹林は、清澄山周辺にやや広い面積が残存しているものの、県内には鎮守の森として、また北総の台地の縁にかろうじて伐採をまぬがれた群落が少数見られるのみである。また房総半島の南では植えられた薪炭林としてマテバシイの群落が見られ、そこにかつて見られたシイ・カシ共生の菌類が逃げ込んで生息している場合もある（吹春 1998a)。このシイ・カシ林に見られる種としては、テングタケ科のシロオビテングタケ、チャオニテングタケ、カバイロコナテングタケ、カブラテングタケ、シロテングタケ、フウセンタケ科のオニフウセンタケ、イグチ科のアシナガイグチ、オオヤシャイグチ、ベニイグチ、ホオベニシロアシイグチ、ベニタケ科のルリハツタケ等がある。また、このような照葉樹林にはタブノキがよく出現するが、このタブノキの枯木・倒木・切株に基質特異性の高い子嚢菌類マユハキタケ科のマユハキタケも見られる。

(2) イヌシデ・コナラとの共生種：次に千葉県の植生を代表するのは、北総の谷津地形を縁取るイヌシデ・コナラの雑木林である。これは長い年月をかけ人里の植生、いわゆる里山として形成された人為的な植生であるが、千葉県を代表する植生であり、そこに生育する特徴のある菌も多い。現在では伐採や埋め立てで谷津が消滅しつつあり、また人の生活の変化により人里の林を管理することが行われなくなったため、林床が荒れ、また富栄養化する傾向にあり、この植生を代表する外生菌根菌は次第に消滅しつつある。この群落に見られコナラと共生する代表的なきのこは、キシメジ科のバカマツタケ、ニセマツタケ、テングタケ科のウスキテングタケ、イボタケ科のコウタケがある。またイヌシデと共生するイグチ科のスミゾメヤマイグチ、ベニタケ科のヒロハシデチチタケがある。

(3) マツ類との共生種:千葉県は三方を海に囲まれており、その防風林として人為的に育まれた海岸のクロマツ林、里山林として人為的に選択育成された内陸のアカマツ林も古い時代からの代表的な植生である（吹春 2021a)。そこに見られマツ類と共生するキシメジ科のシモコシ、ハマシメジ、腹菌類のショウロは健全なマツ林を代表するきのこである。また内陸部のマツ林も激減し、江戸時代には房総の代表的な換金作物であったサルノコシカケ科のブクリョウも最近ではほとんど見られなくなった。

(4) モミとの共生種：房総半島の丘陵地の尾根にはモミが生えており、モミと共生する菌も見られる（吹春 2021b)。モミ林も清澄山周辺を除いてはほとんど見られなくなった。モミと共生し菌根をつくる、ヌメリガサ科のヒメサクラシメジ、キシメジ科のモミタケなどがモミ林を代表するきのこである。

(5) 砂質の自然海岸環境に依存する種：房総半島は二方を海に囲まれ、外房·内房ともにかつては豊富な砂質の自然海岸を保有していたが、近年このような海岸は急速に失われつつあり、また護岸等の影響で供給される砂も激減し、自然な砂浜は急速に消滅しつつある。このような環境に依存する種類の調査が近年すすみ多数の種類が目録化されつつある（吹春 2022b)。このような種類の中から、今回房総の海岸にみられる腹菌類のコナガエノアカカゴタケ、ハマベダンコタケ、ナガエノホコリタケ、ウネミケシボウズタケ、子嚢菌類のスナヤマチャワンタケを加えた。

(6) 熱帯・亜熱帯種：今回選定したキシメジ科のアミヒカリタケ、ヤコウタケは熱帯を中心に分布する種であり、沖縄以南の赤道周辺では普通に見られる種で、木材腐朽性である点で特定の植物群落にその生育をそれほど依存しない。しかし、両種ともに千葉県を含む関東地域平地部付近が北限となっており、発生地点も少なく、県内では希産種であり、かつ、ある程度の規模の植物群落にその生存を依存しており、その環境の喪失が危惧されるため今回の選定の対象とした。

(7) 希産種：希である種を絶滅に瀕する種としてとりあげるのはよくないのだが、植生にあまり依存せず、希産種でその生息地が消滅しつつあるものを対象とした。このようなものとしてイグチ科に属するザイモクイグチ、腹菌類に属するキヌガサタケ、アカダマキヌガサタケ、アンドンタケなどを選定した。

4 選定結果

以上の基準により選定した種類は、1999 年版 (吹春 1999a、30 種選定)、旧改訂版（吹春 2004b、31 種選定；吹春 2009d、35 種選定）に引き続き、特に保護を要すると思われる 40 種を選定し、今回の選定基準に従い次のカテゴリーに分けた。なお、菌類に関しては X（消息不明・絶滅生物)、EX（野生絶滅）に該当する種はなかった。

A（最重要保護生物）：担子菌類 2 種。
B（重要保護生物）：担子菌類 8 種、子嚢菌類 2 種。
C（要保護生物）：担子菌類 14 種、子嚢菌類 1 種。
D（一般保護生物）：担子菌類 13 種。

5 保護を要する大型菌類の概要と保護対策

きのこの場合、たとえ地上に発生している子実体（きのこの部分）を全て採集したとしても、地下部の菌糸塊の生

存が保証されている限り、その生存にはほとんど影響がないと考えられている。一例として、数百年以上にもわたって強い採集圧にさらされてきたマツタケは環境が悪化する昭和初期まで、毎年豊富に発生してきた。今回のリストにあるバカマツタケ、ニセマツタケ、ショウロなど、県内で歴史的に食用に供されてきた菌種についても、人為による子実体の採集が絶滅を招くものではないことは自明である。きのこ採集においては、林床を荒らさす、その菌の生育環境を悪化させるようなことをしないかぎり、きのこを絶滅させるものではない。重要なのは、菌の生育環境及びきのこと共生する植物群落の保全である。群落が健全に保全される限り、高い確率でそこに共生している菌の生育は保全されると考えられる。しかし、植物群落の皆伐や、群落の面積の縮小等の行為により、共生菌の生存は強く脅かされる。

今回、選定基準として特定の植物群落と共生・依存型の種をとりあげたのだが、これらの菌種は外生菌根菌が多い。すなわち、ブナ科（シイ・カシ、コナラ）、マツ科（クロマツ、アカマツ、モミ）、カバノキ科（イヌシデ）などと外生菌根をつくり共生しているもので、植物が消滅してもまた菌が消滅しても、共倒れになる生物である。これらの植物がつくる植生が、1) シイ・カシの照葉樹林、2) イヌシデ・コナラの落葉樹林、3) 海岸や内陸のマツ林、4) モミ林である。このうち１）と４）は千葉県本来の植生であり、長い年月をかけて放置していれば自然に成立する植生である。このような植生に依存する菌を保護するためには、このような自然環境が、できるだけ人為を省かれた状態で広い面積にわたり、長期に保全されていく必要がある。

特にシロオビテングタケは、鳴川市の東大千葉演習林が最初に発見されたタイプ産地であり、現在では中国、タイ、インドで発見されているが、日本では本県の産地のみしか知られていない。本種は東アジアのシイ・カシ林で多様化を果たした「東南アジア要素」（吹春 1998c) と考えられ、かつて東アジアに広がる固有のシイ・カシ林に広く見られた種類であると考えられるが、人為的な開発行為等で東アジア各地のシイ・カシ林で生息域が減少する中、長期間の伐採を偶然免れた千葉県のシイ・カシ林に生き残ったものであると考えられる。人為の影響が長期間にわたり少なく、完全に裸地にならず、ある程度の規模の菌類と共生できる植物群落が長期間存続してきたと考えられる東大千葉演習林のシイ・カシ林が、千葉県の菌類の生存にとっても重要かつ貴重であることを象徴する種である（吹春 2004b; 吹春ほか 2017)。

また 2）イヌシデ・コナラの雑木林、そして 3）海岸のクロマツ林や内陸のアカマツ林は、人里の植生として人為的に形成された「里山」の植生である。前者は伐採や埋め立てで谷津が消滅しつつあり、かつ人里における林の管理不足で林床が荒れ、富栄養化し、消滅しつつある。後者のマツ林も、雑木林同様富栄養化し、消滅する傾向にある。人為の林であるとしても、千葉県の歴史景観を古くからつくりあげ（吹春 2021a)、郷土の自然として評価に値するもの、そしてそこに密接に結びついた共生生物群は、やはり保護していく必要があると考えられる。以上のことから、イヌシデ・コナラの雑木林であれば里山を保護する千葉市の泉自然公園のような形で、また、海岸林であれば山武市の林床を管理する蓮沼海浜公園、また若い樹齢の幼木を継続的に植栽する旭市の海浜林のような形で、人為的に保存し維持管理していくことが、共生生物群を含めて保護することにつながると考えられる。

さらに、人為の植栽も無視できない営為である。前述のように植えられた薪炭林のマテバシイ群落に、かつて生息していたシイ・カシの外生菌根菌が逃げ込んで生息していることが観察されている（吹春 1998a)。またマツ類が植栽された千葉市の稲毛海浜公園にも、かつてのマツ林で見られたであろう外生菌根菌群集が回復する兆しがある（吹春 2004a)。このような理由で、公園などに植栽を行う場合でも、かつて郷土を覆っていた潜在自然植生を、また歴史景観をつくってきた植生を、再度植栽によってよみがえらせ、かつてそこに生息していた共生生物群をよみがえらせることも、積極的な保護として望ましい。

全ての菌種が減少傾向にあるわけではない。今回選定した千葉県が基準産地であるアンドンタケは、前回の改訂以降、発生地点はそれほど多くないにしても、その基準産地付近で頻度高く発見・採集されるようになった。このように非常に希と思われていた種類について再発見や増加の傾向が見られるものも希にある。そのためにも、継続した調査・観察をおこない、レッドデータブックシリーズの改訂作業を継続し続ける必要があると思われる。

6 記述様式

配列は「A」、「B」「C」、「D」のカテゴリー区分の順に、各区分の中は担子菌類、子嚢菌類の順に、その中の配列順および和名は今関 · 本郷（1987, 1989）に、学名・所属の目や科・命名者名は CABI が運営するウエブサイト Index Fungorum（http://www.indexfungorum.org/Names/Names.asp）に基本的に従った。また同じ科において種の配列はアルファベット順とし、それぞれの種には和名のあとに所属する科と目を記した。

種の記述は、種の特性として形態や近縁種との区別点、生態を概略し、分布や 県内の状況、保護を要する要因についても述べた。なお本文で記述した種の千葉県内におけるより詳しい情報についてはそれぞれに引用した文献を、

種のより詳しい解説や専門用語等については今関・本郷（1987, 1989）を参照されたい。

7 引用文献

Adhikari, M. K. (2000) Mushrooms of Nepal. P. U. Printers, Kathmandu

Alfredo, V., V. Matteo, C. Matteo, C. Fabrizio, B. Fabrizio, B. Enrico and E. Enrico (2012) Molecular validation of *Sarcodon quercinofibulatus*, a species of the *S. imbricatus* complex associated with Fagaceae, and notes on *Sarcodon*. Mycological Progress 12(3): 465-474

Aoki, W., N. Bergius, S. Kozlan, F. Fukuzawa, H. Okuda, H. Murata, T. A. Ishida, L.-M. Vaario, H. Kobayashi, E. Kalmis, T. Fukiharu, S. Gisusi, K. Matsushima, Y. Terashima, M. Narimatsu , N.Matsushita, K.H. Ka, F. Yu, T. Yamanaka, M. Fukuda and A. Yamada (2022) New findings on the fungal species *Tricholoma matsutake* from Ukraine, and revision of its taxonomy and biogeography based on multilocus phylogenetic analyses. Mycoscience 63: 197-214

浅井郁夫 (2004) 日本産 *Tulostoma striatum* について . 日本菌学会会報 45: 11-13

浅井郁夫 (2008) ケシボウズをめぐる長〜いお話 . 千葉菌類談話会通信 24: 6-15

Corner, E. J. H. and C. Bas (1962) The genus *Amanita* in Singapre and Malaya. Persoonia 2: 241-304

Cui, Y.-Y., Q. Cai, L.-P. Tang, J.-W. Liu and Z. L. Yang (2018) The family Amanitaceae: molecular phylogeny, higher-rank taxonomy and the species in China. Fungal Diversity 91: 5–230

Dring, D. M. (1980) Contributions towards a rational arrangement of the Clathraceae. Kew Bull 35: 1-96

Eberhardt, U., H. J. Beker, N. Schuetz, M. Mikami, T. Kasuya (2020) Rooting Hebelomas: The Japanese '*Hebeloma radicosum*' is a distinct species, *Hebeloma sagarae* sp. nov. (Hymenogastraceae, Agaricales). Phytotaxa 456: 125-144

吹春公子 (2007) 佐倉城址公園に発生したキヌガサタケ 2 種 . 千葉菌類談話会通信 22: 14-17

吹春公子 (2008) 佐倉に発生したアカダマキヌガサタケの成長記録と疑問点 . 千葉菌類談話会通信 24: 54-57

吹春俊光 (1996) 第 3 節きのこ . In 千葉県史料研究財団 (編), 千葉県の自然誌 本編 1. 千葉県の自然 , pp. 251-257, 千葉県 , 千葉市

吹春俊光 (1998a) 第 2 章第 1 節森林・海岸 , 5 シイ・カシの照葉樹林 , 6 コナラ・イヌシデの雑木林 , 7 公園の林 . In 千葉県史料研究財団 (編), 千葉県の自然誌 . 本編 4 千葉喋の自然 , pp. 64-68. 千葉県 , 千葉市

吹春俊光 (1998b) 第 2 章第 2 節草原・耕地 . In 千葉県史料研究財団 (編), 千葉県の自然誌 . 本編 4 千葉喋の自然 , pp. 69-71. 千葉県 , 千葉市

吹春俊光 (1998c) 第 3 章第 6 節担子菌門 . In 千葉県史料研究財団 (編), 千葉県の自然誌 . 本編 4 千葉県の自然 , pp. 146-185. 千葉県 , 千葉市

吹春俊光 (1999a) 菌類 . In 千葉県環境部自然保護課 (編), 千葉県の保護上重要な野生生物—千葉県レッドデータブック—植物編 , pp. 333-345. 千葉県環境部自然保護課 , 千葉市

吹春俊光 (1999b) キヌガサタケとアンドンタケ . 千葉菌類談話会通信 15: 18

吹春俊光 (2000a) 金茸と銀茸 . 千葉菌類談話会通信 16･17: 3-4

吹春俊光 (2000b) 千葉キノコ事情 . 千葉菌類談話会通信 18: 4-6

吹春俊光 (2003) 菌類—房総きのこ今昔 . In 野の花今昔 , pp.104-107. うらべ書房 , 木更津

吹春俊光 (2004a) 第 3 章第 3 節植物一菌類 (きのこ). In 千葉県史料研究財団 (編), 千葉県の自然誌 . 本編 8 変わりゆく千葉県の自然 , pp. 417-425. 千葉県 , 千葉市

吹春俊光 (2004b) 菌類 . In 千葉県環境生活部自然保護課 (編), 千葉県の保護上重要な野生生物—千葉県レッドリスト (植物編) 2004 年改訂版 , p. 16. 千葉県環境部自然保護課 , 千葉市

吹春俊光 (2005a) 第 1 章街の植物—概説 , 第 1 章第 1 節街の植物の特徴 . In 千葉県史料研究財団 (編), 千葉県の自然誌別編 2 千葉県植物写真集 , pp. 2-7.　千葉県 , 千葉市

吹春俊光 (2005b) 第 3 章第 1 節 4 シイ・カシ林のきのこ , 第 3 章第 2 節 3 コナラ林のきのこ , 第 3 章第 3 節 5 モミ林・マツ林のきのこ . In 千葉県史料研究財団 (編), 千葉県の自然誌別編 2 千葉県植物写真集 , pp. 128-129, 154-155, 182-183. 千葉県 , 千葉市

吹春俊光 (2005c) 第 6 章第 6 節 菌類 (きのこ). In 千葉県史料研究財団 (編), 千葉県植物写真集 , pp. 384-385. 千葉県 , 千葉市

吹春俊光 (2007) きのこ王国･日本の秘密は里山にあった . In (財) 日本自然保護協会 (編), 自然の見方が変わる本 , pp. 138-141. 山と渓谷社 , 東京

吹春俊光 (2008) 房総のキノコ—生活のよき伴侶 . In ふるさと文化研究会 (編) 房総 (千葉) 学検定学習帳 , pp. 44-48. 国書刊行会 , 東京

吹春俊光 (2009a) 勝浦の朝市のきのこ . 千葉函類談話会通信 25: 4-6

吹春俊光 (2009b) チャオニテングタケは珍しいきのこか？. 千葉菌類談話会通信 25: 16-19

吹春俊光 (2009c) きのこの下には死体が眠る . 技術評論社 , 東京

吹春俊光 (2009d) 3-2 大型菌類 . In 千葉県レッドデータブック改訂委員会 (編), 千葉県の保護上重要な野生生物—千葉県レッドデータブック—植物・菌類編 , pp. 435-454. 千葉県環境部自然保護課 , 千葉市

吹春俊光 (2017) 房総の森ときのこ (その 1)「マツ林のきのこ」. 千葉菌類談話会通信 33: 93-96

吹春俊光 (2018) 房総の森ときのこ (その 2)「イヌシデ・コナ

ラ林のきのこ」. 千葉菌類談話会通信 34: 62-65
吹春俊光 (2019) 房総の森ときのこ (その 3)「シイ・カシ林のきのこ (1)」. 千葉菌類談話会通信 35: 110-116
吹春俊光 (2020) 房総の森ときのこ (その 4)「シイ・カシ林のきのこ (2)」. 千葉菌類談話会通信 36: 43-48.
吹春俊光 (2021a) 絵葉書や浮世絵などでたどる房総のきのこ文化―房総で何故ハツタケが愛されているのか―. 千葉中央博研究報告 15 (2): 107–127
吹春俊光 (2021b) 房総の森ときのこ (その 5)「モミ林のきのこ」. 千葉菌類談話会通信 37: 109-112
吹春俊光 (2022a) きのこに寄生する菌類―コショウイグチの仲間―. 千葉菌類談話会通信 38: 75-78
吹春俊光 (2022b) 房総の森ときのこ (その 6)「海岸のきのこ」. 千葉菌類談話会通信 38: 66-68
吹春俊光・服部力・腰野文男・大作晃一・野村麻結実・堀米礼子 (1995) 千葉県菌類誌 (I) 千葉県産大型担子菌類相 . 中博自報特別号 2: 125-155
吹春俊光・腰野文男 (1994) 市原市の大型菌類 . In 市原市環境部環境保全課 (編), 市原市自然環境実態調査報告書 . pp. 261-264. 市原市環境部環境保全課
吹春俊光・腰野文男 (2000) 佐倉市の大型菌類相 . In 佐倉市自然環境調査団 (編), 佐倉市自然環境調査報告書 , pp. 121- 128. 佐倉市経済環境部環境保全課 , 佐倉市
吹春俊光・腰野文男 (2005) 第 1 章第 2 節街の公園と植物 , 第 1 章第 3 節街の街路樹 , 第 1 章第 4 節街の景観と植物 , 第 1 章第 6 節街の中のきのこ . In 千葉県史料研究財団 (編), 千葉県の自然誌別編 2 千葉県植物写真集 , pp. 8-37, 48-55. 千葉県 , 千葉市
吹春俊光・腰野文男・服部力 (2017) 東京大学千葉演習林の大型菌類相 . 中博自報特別号 10: 393-410
吹春俊光・腰野文男・服部力・大作晃一・小沼良子 (2002) 千葉県菌類誌 (II) 大型担子菌類追加目録 . 中博自報特別号 5: 95-110
吹春俊光・腰野文男・小沼良子 (1994) 生態園の大型菌類相 . 中博自報特別号 (1): 87-93
吹春俊光・腰野文男・大野将史・佐野悦三・P. T. Nguyen・N. H. Nguyen・清水公徳 (2022) 県立房総のむらの大型菌類相 . 千葉中央博研究報告 16: 23–47
Fukiharu, T., T. Odajima, R. Shimadate, H. Saito and E. Sano (2006) Fungal Flora in Chiba Pref., Central Japan (IV) T*uber indicum*, the First Record of Hypogenous Ascomycete Collected in Chiba. 中博自報 (9): 1-6
古川久彦・今関六也 (1989) イボタケ科 . In 今関六也・本郷次雄 (編), 原色日本新菌類図鑑 (II), pp. 122-128. 保育社 , 大阪
Halling R. E. and N. A. Fechner (2011) *Heimioporus* (Boletineae) in Australia. Australasian Mycologist 29: 47-51
林芳緒美 (1999) キヌガサタケ . 千葉菌類談話会通信 15: 19.
Herrera M., R. Wang, P. Zhang and F.-Q Yu. (2022) The ectomycorrhizal association of *Tricholoma matsutake* and two allied species, *T. bakamatsutake* and *T. fulvocastaneum*, with native hosts in subtropical China. Mycologia 114: 303-318
本郷次雄 (1978) 日本産ハラタケ目の地理的分布 . 日本菌学会会報 19: 319-323
本郷次雄 (1987a) ヌメリガサ科・キシメジ科・テングタケ科 . In 今関六也・本郷次雄 (編), 原色日本新菌類図鑑 (I), pp. 37-136. 保育社 , 大阪
本郷次雄 (1987b) フウセンタケ科 . In 今関六也・本郷次雄 (編), 原色日本新菌類図鑑 (I), pp. 212-247. 保育社, 大阪
本郷次雄 (1989) ベニタケ科 . In 今関六也・本郷次雄 (編), 原色日本新菌類図鑑 (II), pp. 44-74. 保育社 , 大阪 .
Horak E. (2004). *Heimioporus* E. Horak gen. nov. - replacing *Heimiella* Boedijn (1951, syn. post., Boletales, Basidiomycota). Sydowia 56 (2): 237-240
井口潔 (1992) 東日本産腹菌類の二希種について . 埼玉県立自然史博物館研究報告 10: 1-10
池田良幸 (2005) 北陸のきのこ図鑑 . 橋本確文堂 , 金沢市 .
今関六也・本郷次雄 (1987) 原色日本新菌類図鑑 (I). 保育社 , 大阪
今関六也・本郷次雄 (1989) 原色日本新菌類図鎚 (II). 保育社 , 大阪
伊藤誠哉 (1959) 日本菌類誌 2 巻 5 号 . 養賢堂 , 東京
Kasuya, T (2004) Gasteromycetes of Chiba Prefecture, Central Honshu. Japan. I. The family Lycoperdaceae. Journal of Natural History Museum and Institute. Chiba 8: 1-11
糟谷大河 (2007) 千葉の砂浜の思い出 . 千葉菌類談話会報 22: 6-9
Kasuya, T. and K. Katumoto (2006) Fungal flora in Chiba pref. central Japan (V). Gasteromycetes 2. addition to the family Lycoperdaceae. Nat. Hist. Res. 9: 29-39.
糟谷大河・高井雅季・保坂健太郎 (2018) 日本産モミタケの分類学的再検討 . 日本菌学会第 62 回大会講演要旨 , P-10, 信州大学農学部
糟谷大河・竹橋誠司・山上公人 (2007) 日本から再発見された 3 種のスッポンタケ属菌 . 日菌報 48：44-56
川村清一 (1933) かごたけトあかかごたけ. 植物学雑誌 5 : 290-294
Kinoshita, A., K. Nara, H. Sasaki, B. Feng, K. Obase, Z. L. Yang and T. Yamanaka (2018) Using mating-type loci to improve taxonomy of the *Tuber indicum* complex, and discovery of a new species, *T. longispinosum*. PLoS ONE 13(3): e0193745. https://doi.org/10.1371/journal.pone.0193745
Kits van Waveren, E. (1977) Notes on the genus *Psathyrella* - V. The sections Ammophilae, Bipellis and Subatratae. Persoonia 9: 199-231
Kits van Waveren, E. (1985) The Dutch, French and British species of *Psathyrella*. Persoonia Suppl 2: 1–300
小林義雄 (1938) 大日本植物誌ヒメノガスター亜目及スッポンタケ亜目 . 三省堂, 東京
腰野文男 (1994) 海岸林のキノコ盛衰記 (2). 千葉菌類談話会通信 8 : 1

腰野文男 (1997a) キヌガサタケの記録 . 千葉菌類談話会通信 13: 6
腰野文男 (1997b) 大栄町のキノコ類 . In 大栄町史編纂委員会 (編), 大栄町史自然編 , pp. 120-132. 大栄町
腰野文男・吹春俊光 (1997) 湾岸都市千葉市のキノコ類 . In 沼田眞 (監), 湾岸都市の生態系と自然保護―千葉市 野生動植物の生息状況及び生態系調査報告 , pp. 379-396. 信山社サイテック , 東京
楠田瑞穂 (2019) バカマツタケはマツタケを凌ぐ . 千葉菌類談話会通信 35: 56-59
Laubner G., Mikulevičienė G. (2016) A series of rhabdomyolysis after ingestion of *Tricholoma equestre*. Acta medica Lituanica : 23 (3)：196-197
Li, Y.-C., F. Li, N.-K. Zeng, Y. Y. Cui and Z. L. Yang (2014) A new genus *Pseudoaustroboletus* (Boletaceae, Boletales) from Asia as inferred from molecular and morphological data. Mycol. Progress 13: 1207-1216
松平喜美代 (1989) ブクリョウ . 佐倉野草の会会報「野草をたずねて」7: 32-33
村川功雄・尾崎煙雄 (2020) 珍菌アンドンタケを模式産地で 90 年ぶりに確認 . 千葉菌類談話会報 36: 4-5
長尾英幸・吹春俊光 (2002) 千葉県菌類誌 (Ⅲ) 子嚢菌類不整子嚢菌綱および盤菌綱 . 千葉中央博自然誌研究報告特別号 (5): 111-132
長沢栄史 (1987) オニイグチ科 . In 今関六也・本郷次雄 (編) 原色日本新菌類図鑑 (Ⅰ), pp. 273-285. 保育社 , 大阪 .
長沢栄史 (1989) イグチ科 . In 今関六也・本郷次雄 (編) 原色日本新菌類図鑑 (Ⅱ), pp. 1-44. 保育社 , 大阪
Neda, H., T. Yokoyama and H. Furukawa (1987) A new lignicolous Pulveroboletus from Japan. Trans. mycol. Soc. Japan 28: 319-324
Nuhn, M. E., M. Binder., A. F. S. Taylor, R. E. Halling and D. S. Hibbett (2013) Phylogenetic overview of the Boletineae. Fungal Biology 117: 479-511
Nuytinck, J. and A. Verbeken (2007) Worldwide phylogeny of *Lactarius* section Deliciosi inferred from ITS and glyceraldehyde-3-phosphate dehydrogenase gene sequences. Mycologia 99(6): 820-832
Oda, T., C. Tanaka and M. Tsuda (2002) *Amanita concentrica* - a new species in *Amanita* section Amanita from Japan. Mycoscience 43: 81-83.
大舘一夫 (2004) 都会のきのこ . 八坂書房 , 東京
大谷吉雄 (1982) 興味深い日本産チャワンタケ 2 種について . 日菌報 23: 379-384
大谷吉雄 (1989) 子嚢菌亜門 . In 今関六也・本郷次雄 (編) 原色日本新菌類図鑑 (Ⅱ), pp. 240-281, 保育社 , 大阪
相良直彦 (2021) きのこと動物―森の生命連鎖と排泄物・死体のゆくえ―. 築地書館 , 東京
Sanmee R., B. Dell, P. Lumyong and S. Lumyong (2007) First record of *Tricholoma fulvocastaneum* from Thailand. Mycoscience 48: 131–133
白土三平 (1987) 白土三平フィールド・ノート―土の味 . 小学館 , 東京
竹橋誠司・星野保・糟谷大河 (2012) 石狩砂丘と砂浜のきのこ . NPO 法人北方菌類フォーラム , 札幌
寺嶋良江 (1996) バカマツタケ . In 井上健 (編), 植物の生き残り戦略 , pp. 156-166. 平凡社 , 東京
寺嶋良江 (1997) シイ林における外生菌根菌バカマツタケの生活様式に関する研究 . 千葉県林業試験場特別研究報告 1: 1-76
寺嶋芳江・冨谷建三 (2000) 千葉のバカマツタケ . 千葉菌類談話会通信 18: 2-3
Terashima, Y., K. Tomiya, M. Takahashi, H. Iwai (1993) Distribution and characteristics of shiros of T*richoloma bakamatsutake* in a mixed forest of *Pasania edulis* and *Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii*. Trans. Mycol. Soc. Japan 34: 229-238.
Verbeken, A. and E. Horak (2000). *Lactarius* (Basidiomycota) in Papua New Guinea 2. Species of tropical montane rainforests. Australian Systematic Botany 13: 649-707
Wächter, D. and A. Melzer (2020) Proposal for a subdivision of the family Psathyrellaceae based on a taxon-rich phylogenetic analysis with iterative multigene guide tree. Mycological Progress 19(11): 1151-1265
渡辺正 (1998) 身近な生物の思い出 . 千葉県生物学会誌 48(1): 132-133
Wu, G., Y.-C. Li, X.-T. Zhu, K. Zhao, L.-H. Han, Y.-Y. Cui, F. Li, J.-P. Xu and Z. L. Yang (2016) One hundred noteworthy boletes from China. Fungal Diversity 81(1), DOI 10.1007/s13225-016-0375-8
Wright, J. E. (1987) The genus *Tulostoma* (Gasteromycetes) - A world monograph. Biblioth. Mycol. 113: 1-338.
山本充弘 (2017) 砂地のきのこたち . 千葉菌類談話会報 33：5-9
Yang, Z. L. and Y. Doi (1999) A contribution to the knowledge of *Amanita* (Amanitaceae, Agaricales) in Japan. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser B 25(3): 107–130.
谷城勝弘 (1988) 千葉県のマツホド（ブクリョウ）を探る―マツホドの再発掘 . 千葉県生物学会誌 34(1): 31-35
吉見昭一 (1989) 腹菌亜綱 . In 今関六也・本郷次雄 (編) 原色日本新菌類図鑑 (Ⅱ), pp. 193-228. 保育社 , 大阪

A　シロオビテングタケ　ハラタケ目・テングタケ科

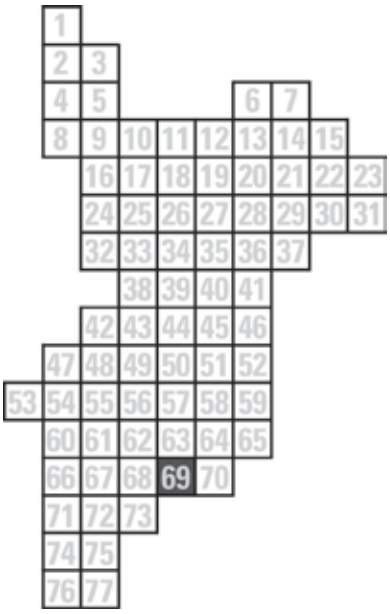
2009	A-B
2017	A-B
2023	A

Amanita concentrica T. Oda, C. Tanaka & Tsuda

【種の特性】シイ・カシ林と共生する外生菌根菌。全体が白色の大型のテングタケ属種で、シロオニタケ（マツカサモドキ亜属・節）に類似するが、傘に条線があることなどからテングタケ亜属・節（テングタケなど）に分類される。

【分布】2000 年に鴨川市の東京大学千葉演習林の荒樫沢に唯一度だけ発生し新種として記載された。その後、中国雲南省、タイ、インドからの発生が明らかになった。日本のシイ・カシ林に見られる外生菌根菌は、中国南部や東南アジア熱帯島嶼にも分布域をもつ「東南アジア要素」であることが多く、本種も広く西日本からその周辺地域のシイ・カシ林に広い分布域をもっていたものと思われるが、人為的な影響等によりアジア全域でシイ・カシ林が激減し、現在ではわずかな地域からのみ発見されているものと考えられる。千葉のシイ・カシ林を代表する種類。

【県内の状況】東大演習林内の荒樫沢（鴨川市清澄山）で 1 回だけ採集された（holotype、CBM-FB-24901）。



【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】Oda et al 2002 ／吹春 2004b, 2005b, c. ／吹春ほか 2017 ／ Cui et. al. 2018

【写真】2000.10.2　東京大学千葉演習林
標本 : CBM FB-24901
（吹春俊光）

A　ナガエノスギタケ　ハラタケ目・ヒメノガステル科

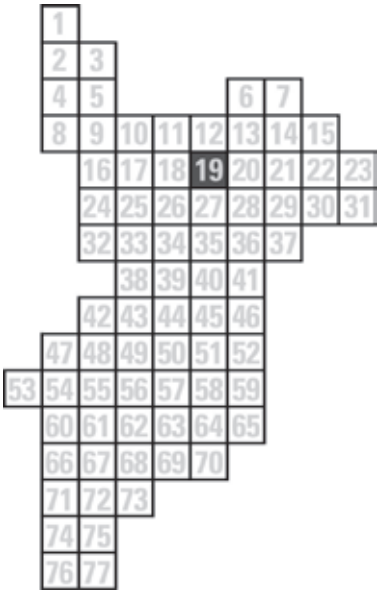
2009	
2017	
2023	A

Hebeloma sagarae T. Kasuya, Mikami, Beker & U. Eberh.

【種の特性】】ブナ科（コナラ，ミズナラ等）と共生する外生菌根菌。明瞭な膜質の内被膜（つば）を持ち、ワカフサタケ属の中では特異な種。モグラ類やトガリネズミ類などの地下棲哺乳類が地中につくる便所跡からのみ発生するという特異な生態で知られている。

【分布】北海道から九州のブナ科樹林。フランスで記載された学名でよばれてきたが、分子系統により日本産のものはユーラシア分布種とは異なることが最近判明した。

【県内の状況】房総のむら（印旛郡栄町）で 1 回だけ採集された（CBM-FB-6122）。



【保護対策】1991 年 9 月末の房総のむらで開催された観察会の鑑定会で並んだたため、正確な発生地点は不明だが、モグラ類の餌が豊富な、水田をのぞむ、排水のよい（斜面）、里山管理されたコナラの雑木林によく見られるため、県内各地の同様に管理された谷津の里山状態での保全が望まれる。

【文献】Eberhardt U. et al 2020 ／相良 2021 ／吹春ほか 2022

【写真】1994.9.30　新潟県胎内市
標本：CBM FB-11720　吹春俊光
（吹春俊光）

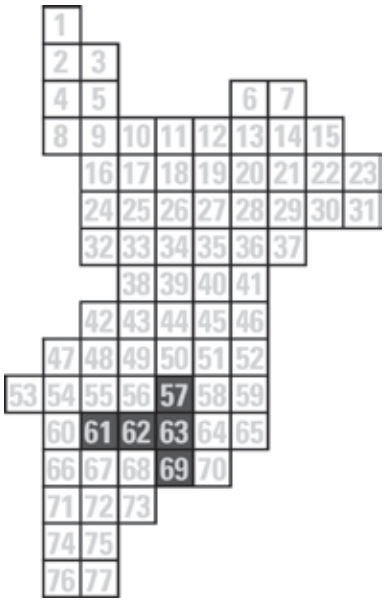
B　モミタケ　ハラタケ目・オオモミタケ科

2009	D
2017	D
2023	B

Catathelasma sp.

【種の特性】モミと共生する外生菌根菌。地下に大きな菌糸の塊をつくり毎年同じ地点に発生する。モミ樹下に一列に十数本発生することもあるが、通常モミ林内の地上に単生することも多い。傘は径 8 ～ 20cm、ときに 30cm に達するものもある。肉は厚くて歯ごたえがあり、ひだは柄に長く垂生する。柄は長さ 10 ～ 20cm、中程が紡錘形に膨らみ下部は細まる。オオモミタケとは、胞子がより小型である点で異なり、県内からはモミタケのみ知られている。分子系統によれば日本産のモミタケとよばれるものは太平洋側と日本海側に形態的に異なる集団が分布し、また北米等の集団（*Catathelasma ventricosum*）とは遺伝的に異なる未記載種であるという（糟谷ほか 2018）。県内では食用とされている。

【分布】日本（北海道～九州）のモミ林。



【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 21 件の発生記録があり、清澄山周辺のモミが混じる森林内、また君津市、市原市など尾根にモミが残存しているような森林内に、夏～秋発生する。一度に大量に収穫できる食用菌として親しまれている。

【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】本郷 1987a ／吹春ほか 1995 ／吹春 1998c,2005c,2021b ／吹春ほか 2017 ／糟谷ほか 2018

【写真】2015.9.11 東京大学千葉演習林
標本 : CBM FB-40811

（吹春俊光）

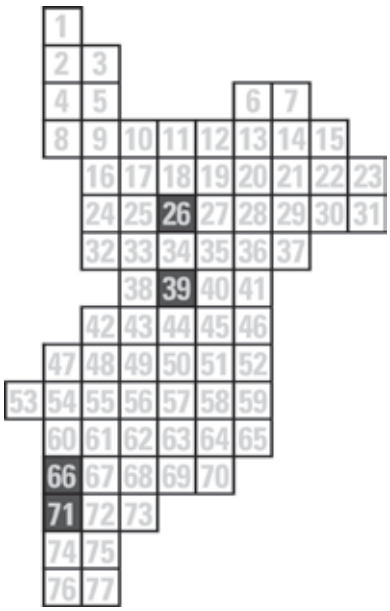
B　アミヒカリタケ　ハラタケ目・クヌギタケ科

2009	A-B
2017	A-B
2023	B

Favolaschia manipularis (Berk.) Teng

【種の特性】熱帯要素。クヌギタケ科にあって子実層が管孔状となる点、子実体全体が発光性を持つという著しい特徴をもつ。森林内の広葉樹の枯れ木上に群生～束生する木材腐朽菌。子実体全体、特に柄に発光性があるが、千葉産のものは肉眼的な発光がみられないものもある。傘は径 1 ～ 3cm。表面は平滑で粘性はなく、幼時は暗灰色であるがしだいにクリーム色から白色の淡色となる、湿時には裏の管孔が透けて見える、孔口は多少放射状に配列する。

【分布】日本では和歌山県（紀伊半島）が分布の北限であったが（本郷 1987a）、その後、千葉県（1987）や東京都中央区（大舘 2004）でも採集されるようになった。このため従来、本州中部の太平洋岸付近が日本における本種の北限と考えられていたが、県内では南房総地域ばかりでなく佐倉市（2016）や千葉市（2022）などからも見つかっており、日本列島を北上しつつある可能性もある。アフリカ、オーストラリア、ミクロネシア、インドネシア等熱帯を中心に分布する。



【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、安房郡鋸南町浮島（1987 年）、南房総市富浦町大房岬（2014 年～）、佐倉城址公園（2016）、千葉市泉自然公園（2022 年）など、県内では 6 地点から 8 件の記録がある。

【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】本郷 1987a ／吹春 1996, 2005c ／吹春ほか 1995, 2002 ／大舘 2004

【写真】2014.6.16 南房総市　標本 : CBM FB-39863

（吹春俊光）

B　ニセマツタケ　ハラタケ目・キシメジ科

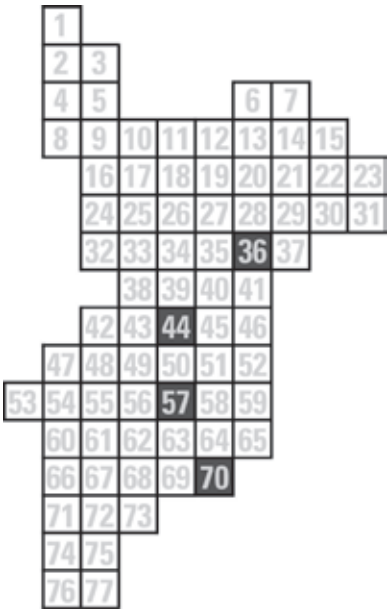
2009	D
2017	D
2023	B

Tricholoma fulvocastaneum Hongo

【種の特性】マツタケの近縁種。マツタケがマツ科と共生することに対し、本種はスダジイなどブナ科と共生し外生菌根をつくる。傘や柄の表面はマツタケに類似するが、より小形でマツタケ臭を欠く。同様な環境に発生するバカマツタケよりも子実体の色は褐色がより強く、柄の基部がより細まり、マツタケ臭を欠き、発生は県内ではより希、等の点で異なる。県内では食用とされている。

【分布】日本（本州・四国・九州・徳之島）、中国、タイ、ラオス。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内から 4 地点 6 件の記録があるが、広く房総半島南部のスダジイ林に発生していると思われる。2011 年の震災前には、勝浦の朝市で 10 月の初旬頃、バカマツタケとともにマツタケの名称で販売されていた食用菌。



【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】本郷 1987a ／吹春 2000b，2005b, c, 2008, 2009a ／吹春ほか 2002 ／ Sanmee et al 2007 ／ Herrera et al 2022 ／ Aoki et al 2022

【写真】2000.10.6　大多喜町

標本 : CBM FB-24936

（吹春俊光）

B　カバイロコナテングタケ　ハラタケ目・テングタケ科

2009	C
2017	C
2023	B

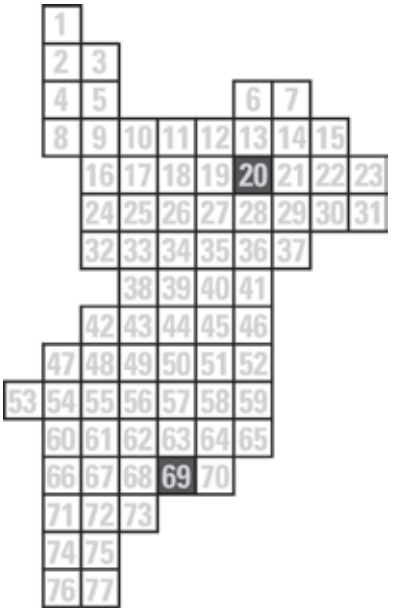
Amanita rufoferruginea Hongo

【種の特性】シイ・カシ林と共生する外生菌根菌。テングタケ節に属する。傘表面や柄の表面が明るい橙褐色の粉質物に密におおわれる点が特徴。つぼは粉質いぼ状で柄の基部にやや輪状にみられる。

【分布】本州以南（西日本のアカマツ・コナラ林やシイ・カシ林など）に、梅雨明けの 7 ～ 9 月に見られる普通種。中国、大韓民国にもみられる「東南アジア要素」。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 2 地点 4 件の発生記録がある（成田市大慈恩寺のシイ林、清澄山のマテバシイの植栽林、7 月中旬～ 9 月上旬）。

【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。



【文献】本郷 1987a ／吹春ほか 1995 ／吹春 1996, 1998a. ／ Cui et. al. 2018

【写真】1989.7.22 東京大学千葉演習林

標本 : CBM FB-2323

（吹春俊光）

B　チャオニテングタケ　ハラタケ目・テングタケ科

2009	A-B
2017	A-B
2023	B

Amanita sculpta Corner & Bas

【種の特性】シイ・カシ林と共生する外生菌根菌。茶褐色の大型のテングタケで。7 ～ 10 月、シイ・カシ林の地上に発生する。傘は大型で、径 8 ～ 24cm、中高から平らに開く、傘表面には暗褐色の被膜が裂けた角錐状から平らないぼを持つ、ひだは淡灰色、のち暗褐色となり、暗色のしみができる。つばは早落性で、つばより下部の柄表面にはささくれが著しく、ときにだんだら模様となる、柄は 12 ～ 24 x 2 ～ 4cm、柄基部は膨れ、つぼの破片が粉状に付着する。

【分布】関東以西（沖縄～千葉）のシイ・カシの照葉樹林、中国、マレーシア、シンガポール、ボルネオ、タイに見られ、シイ・カシ林に固有の「東南アジア要素」。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 6 地点 11 件の発生記録がある：1994 年、2007 年、2013 年 10 月に市原市民の森；2007 年と 2008 年の 10 月に君津市清和県民の森；2000 年 10 月に大多喜町、2018 年 8 月に東大演習林（君津市）；1998 年と 2004 年の 9 月と 10 月に千葉市泉自然公園。

【保護対策】生育環境にある県内のシイ・カシ林を可能な限り維持・保全していくことが望ましい。

【文献】Corner and Bas 1962 ／吹春ほか 1995, 2002 ／ 吹 春 1996, 1998c, 2000b, 2005b, 2009b,c, 2019 ／ Cui et. al. 2018

【写真】2000.10.11 大多喜町　標本 : CBM FB-24985

（吹春俊光）

B　ヤシャイグチ　イグチ目・イグチ科

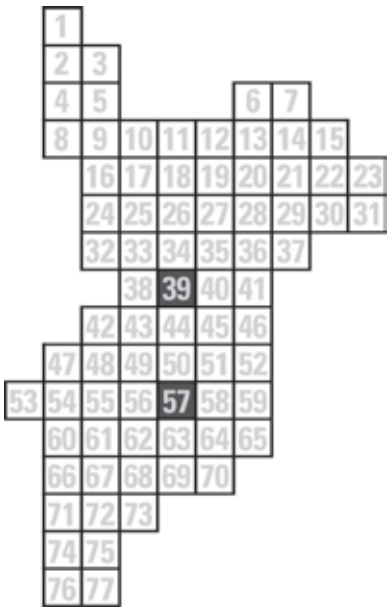
2009	
2017	
2023	B

Austroboletus fusisporus (Kawam. ex Imazeki & Hongo) Wolfe

【種の特性】】ブナ科（スダジイ等）と共生する外生菌根菌。黄褐色の傘表面には粘性があり、しばしば細かくひび割れ多少鱗片状～粒状。管口は初め被膜に覆われ、初めピンク色を帯びた白色、のち灰紅～紅紫褐色というイグチ類の中では特異な色を持つ。柄は傘とほぼ同色の隆起した縦長の網目で被われる。

【分布】西日本～東アジア（中国雲南省・湖南省・海南省）。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 2 地点 2 件の発生記録がある：1999 年 10 月に千葉市泉自然公園；2018 年 10 月に市原市民の森。



【保護対策】生育環境にある県内の林を可能な限り維持・保全していくことが望ましい。

【文献】長 沢 1987 ／ Wu et al 2016

【写真】2018.10.13 市原市　標本 : CBM FB-44040

（吹春俊光）

B　コナガエノアカカゴタケ　スッポンタケ目・スッポンタケ科

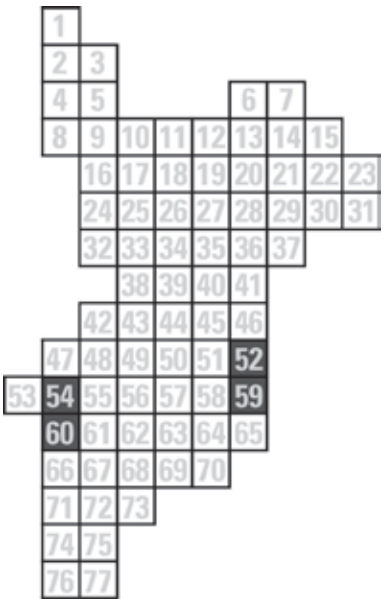
Lysurus periphragmoides (Klotzsch) Dring

2009	A-B
2017	A-B
2023	B

【種の特性】砂質の砂浜自然海岸依存種。菌蕾は類球形～卵形、白色。成熟すると托を伸ばし高さ 5 ～ 10cm。托の上部にはピンク色～橙色で網目を持ったカゴ状で類球形の頭部を持つ。グレバは粘液状で頭部に形成され、オリーブ色～褐色、強い臭いを発する。初夏～冬に、海浜生植物が繁茂する砂浜海岸の、コウボウムギが生育する地帯よりも海側に、単生～散生する。

【分布】汎世界分布種。日本では茨城・千葉・静岡・愛知のごく限られた地域の砂浜海岸にのみ希に発生する。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、長生郡一宮町、富津市、いすみ市の 5 地点から合計 7 件の記録がある。生育依存環境である自然で良好な海浜砂地の減少や環境の悪化に伴い、潜在的な発生環境が減少していると思われる。



【保護対策】本種が生育を依存する自然な砂浜海岸は、人為開発・砂の減少などにより現在急速に減少している。砂質の自然海岸を良好な状態で保存し保護していくことが本種の保護のために必要である。

【文献】Dring 1980 ／吹春ほか 2002 ／山本 2017 ／吹春 2022b

【写真】2012.11.1　いすみ市岬町　柳研介（吹春俊光）

B　マユハキタケ　ユーロチウム目・マユハキタケ科

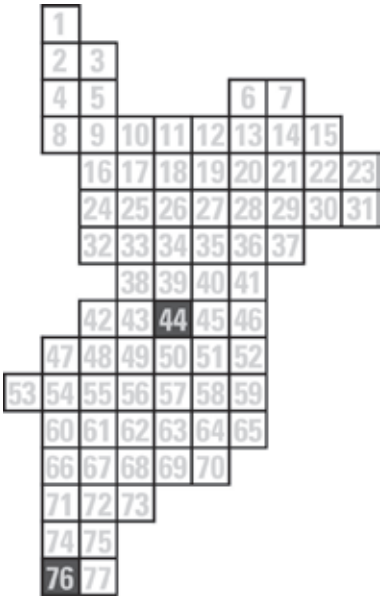
Trichocoma paradoxa Jungh.

2009	A-B
2017	A-B
2023	B

【種の特性】大径木依存種。子実体は通常タブノキの樹幹に樹皮を破って生じる。子実体は始め内外の 2 層の被膜におおわれ、のち外被膜は破れ、薄い内被膜に包まれた基本体が柱状に 1 ～ 2cm の高さに伸び上がる。ついで内被膜が破れ、内部に子嚢を含み、上部は細裂した菌糸束からなる刷毛状の基本体を露出する。子嚢はこの基本体中に散在する。不完全世代は *Penicillium* 型。発生基質となる樹木は他にツブラジイやイヌビワにも生じるという。

【分布】関東以西。北米、南米、ジャワ、ボルネオ、スリランカ。

【県内の状況】県内の特にタブノキの老木の切り株等がある場所にみられる。長柄町の比較的良好に残された社寺林内の場合、タブノキ樹幹や切株等に、通年子実体が観察されている。国内でも子実体が見られる場所は希であるが、調査が進めば県内では胸高直径の比較的大きなタブノキの枯樹幹や古い切り株に生育しているものがまだ発見できると考えられる。



【保護対策】タブノキ巨木の切り株や倒木に発生するため、発生している、また発生の可能性のある切り株や倒木を、管理の名のもとに森林内から撤去することなく、また破壊することなく、生育地の林の状態と環境を現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】大谷 1989

【写真】2020.3.1　長生郡長柄町　加藤恵美子（吹春俊光）

B　スナヤマチャワンタケ　チャワンタケ目・ピロネマ科

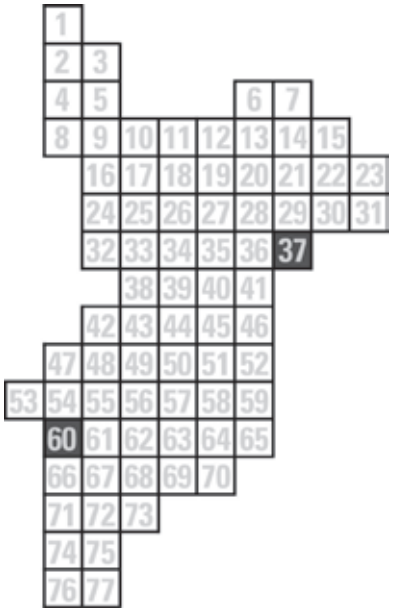
2009	
2017	C
2023	B

Lamprospora ammophila (Saut.) Boud.

【種の特性】砂質の砂浜自然海岸依存種。千葉県ではおもに冬の時期、11 月から 1 月にかけて、自然な砂浜海岸の、コウボウムギなどの植生帯に見られる。直径 5cm、茶碗状、砂の上に子実体を形成するが、ときに砂に埋もれていることもある。現在、日本産種には欧州産の学名が採用されているが、日本産と欧州産種の検討は必要と思われる。

【分布】日本，欧州，北アフリカ

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、匝瑳市野手浜、山武郡蓮沼海岸、富津市新舞子浜など 3 地点から 5 件の記録がある。



【保護対策】本種が生育を依存する自然な砂浜海岸は、人為開発・砂の減少などにより現在急速に減少している。砂質の自然海岸を良好な状態で保存し保護していくことが本種の保護のために必要である。

【文献】大谷 1982 ／糟谷 2007 ／山本 2017 ／吹春 2022b

【写真】2015 .11.7 富津市
標本 : CBM FA-41645

（吹春俊光）

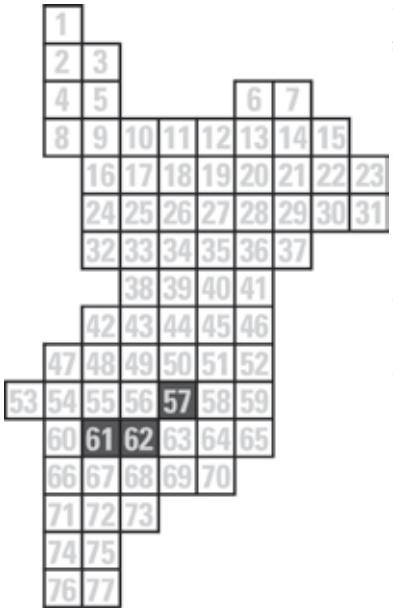
B　イボセイヨウショウロ　チャワンタケ目・セイヨウショウロ科

2009	A-B
2017	A-B
2023	B

Tuber longispinosum A.Kinoshita

【種の特性】ブナ科（シイ・カシ類・コナラ等）と共生する外生菌根菌。子実体は類球形、2 ～ 4 cm、外皮は黒褐色で、四・五角錐のいぼにおおわれる。断面ははじめ類白色、成熟と共に黒褐色となり、セイヨウショウロ属特有の白色繊維状の菌糸で区分けされた、いわゆる大理石模様をあらわす。千葉産のものは，当初 *Tuber indicum* とされていたが（Fukiharu et al 2006）分子系統による検討の結果、*Tuber indicum* は中国にのみに分布，日本産の黒トリュフは、現在 *Tuber longispinosum*（今回の千葉産の種）とアジアクロセイヨウショウロ *Tuber himalayense* の 2 種（Kinoshita et al 2018）。

【分布】日本。本種は、ヒマラヤの中腹標高約 2000 mのナラ林で記載されたアジアに分布する *Tuber indicum* に形態的に類似する類縁種として 2018 年に新種記載された。



【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内から 4 地点 16 件の記録がある。本種はやや古い履歴をもつブナ科の自然林的な森付近の、やや攪乱された場所（道路脇など）に発生することが多く、単なる攪乱地には発生しないことから、ブナ科の自然林に依存した種類と思われる。

【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】Fukiharu et al 2006 ／ 吹春 2008 ／ Kinoshita et al 2018

【写真】2006.1.29　大多喜町　標本 : CBM FA-36269

（吹春俊光）

大型菌類 C/D ランク　写真　1/2

C　ヒメサクラシメジ　2018年11月5日
東京大学千葉演習林
（CBM FB-44114）　550ページ

C　カブラテングタケ　2015年
9月30日　東京大学千葉演習林
（CBM FB-40906）　550ページ

C　ハマベダンゴタケ　2003年
6月7日　富津市
（CBM FB-33729）　550 ページ

C　ナガエノホコリタケ
2003年7月16日　富津市
（CBM FB-33827）　550 ページ

C　ウネミケシボウズタケ　2000
年11月26日　山武市
（CBM FB-30241）　551ページ

C　ヤコウタケ　2013年6月27日
館山市　加藤惠美子　551ページ

C　スナジクズタケ　2015年11月7日
富津市（CBM FB-41664）551ページ

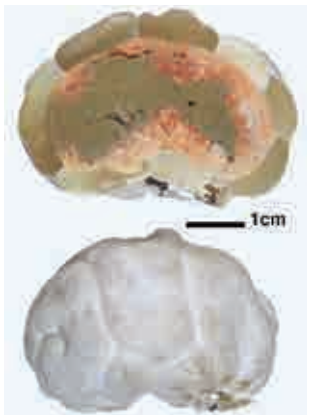
C　オオヤシャイグチ
2004年9月23日　印旛郡栄町（
CBM FB-34823）551ページ

C　ザイモクイグチ　1994年9月25日
千葉市（CBM FB-11611）552 ページ

C　ベニイグチ
2011年9月15日　山梨県
大作晃一　552ページ

C　ホオベニシロアシイグチ
2013年9月23日 印旛郡栄町
（CBM FB-39732）　552 ページ

C　ルリハツタケ
1991年10月23日　館山市
（CBM FB-3559）　552ページ



C　アンドンタケ　2019年7月2日
東京大学千葉演習林
（CBM FB-44325）　553 ページ

C　アンドンタケ　2020年6月16日
東京大学千葉演習林
村川功雄　553ページ

C　キヌガサタケ
2016年6月23日 佐倉市
（CBM FB-41733）　553ページ

C　アカダマキヌガサタケ
2005年10月5日 佐倉市
（CBM FB-35863）北川公子　553 ページ

D　バカマツタケ　2000年10月6日
夷隅郡大多喜町　(CBM FB-24935)　554ページ

D　シモコシ　1996年11月6日
山武市　(CBM FB-15673)　554ページ

D　ハマシメジ　1987年11月3日
長生郡一宮町　(CBM FB-816)　554ページ

D　シロテングタケ　2012年9月13日
印旛郡栄町　(CBM FB-39366)　554ページ

D　ウスキテングタケ　2004年9月16日
千葉市　(CBM FB-34784)　555ページ

D　オニフウセンタケ　2019年10月20日
君津市　(CBM FB-44644)　555ページ

D　ヒロハシデチチタケ
2018年5月10日　千葉市
(CBM FB-43702)　555ページ

D　アシナガイグチ　2015年
8月24日　東京大学千葉演習林
(CBM FB-40750)　555ページ

D　ムラサキヤマドリタケ
2013年9月6日　印旛郡栄町
(CBM FB-39691)　556ページ

D　スミゾメヤマイグチ
1999年10月8日　佐倉市
(CBM FB-24430)　556ページ

D　ショウロ　1992年5月22日
長生郡一宮町
(CBM FB-4344)　556ページ

D　コウタケ　2008年10月19日
君津市　(CBM FB-37522)　556ページ

D　ブクリョウ　1984年3月25日
成田市　(CBM FB-2081)　557ページ

C　ヒメサクラシメジ　ハラタケ目・ヌメリガサ科

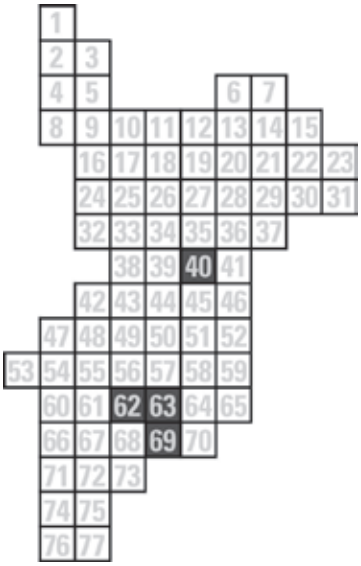
2009	D
2017	D
2023	C

Hygrophorus capreolarius (Kalchbr.) Sacc.

【種の特性】モミと共生する外生菌根菌。県内で食用とされるサクラシメジより小型で、子実体全体がより濃い小豆色、発生は秋。傘は 2 ～ 5cm、まんじゅう形から平らに開く、表面は平滑、あるいは中央部に圧着小鱗片をもち、暗赤褐色、湿っている時には粘性がある。

【分布】日本。北半球温帯以北。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では鴨川市（東大演習林）、君津市、千葉市緑区の神社、夷隅郡大多喜町など 9 地点 18 件の発生記録がある。モミがみられる南房総の山地や、北総台地の神社などに発生する。



【保護対策】菌根共生するモミが生育する環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】本郷 1987a ／吹春ほか 1995 ／吹春 1998c

（吹春俊光）

C　ハマベダンゴタケ　ハラタケ目・ハラタケ科

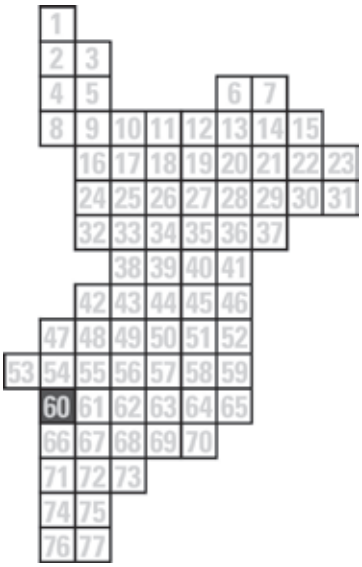
2009	C
2017	C
2023	C

Bovista dryina (Morgan) Demoulin

【種の特性】砂浜自然海岸依存種。子実体は類球形、径 18 ～ 25 mm。外皮は黄褐色～灰褐色の疣状突起からなる。内皮は紙質、赤褐色～暗褐色。担子胞子は球形～類球形、径 4 ～ 5.5µm。弾糸は幅 6µm に達し、希に分枝し、小孔を欠く。海浜生植物が繁茂する砂浜海岸に、初夏に局地的に単生～散生する。生育依存環境である自然で良好な海浜砂地の減少や環境の悪化に伴い、潜在的な発生環境が減少していると思われる。

【分布】日本。北米、南米、カナリー諸島。

【県内の状況】2003 年富津市の海岸で採集されたものが日本新産種として報告された（Kasuya2004）。その後の採集例は無く、また県内を含め日本での分布の実態は不明である。



【保護対策】本種が生育を依存する自然で砂浜海岸は、人為開発・砂の減少などにより現在急速に減少している。砂質の自然海岸を良好な状態で保存し保護していくことが本種の保護のために必要である。

【文献】Kasuya 2004

（吹春俊光）

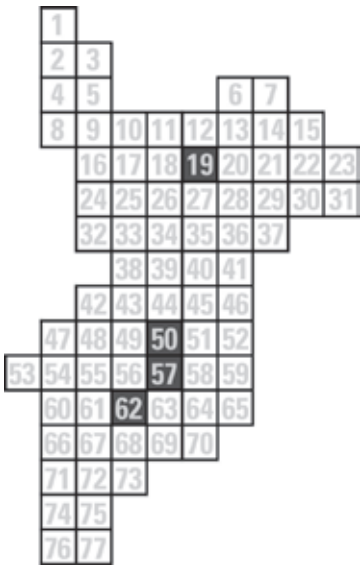
C　カブラテングタケ　ハラタケ目・テングタケ科

2009	D
2017	D
2023	C

Amanita gymnopus Corner & Bas

【種の特性】ブナ科（シイ・カシ類）と共生する外生菌根菌。夏から秋に発生。マツカサモドキ節に属し、柄の基部がカブラ状に著しく膨らみ、その柄の基部表面につぼの痕跡が無く裸である点、膜質のつば（内被膜）は傘縁と柄の最上部から垂れ下がるが、もう 1 カ所、柄の途中に、指輪のような細いリング状のつば（被膜の名残）が残存する点、ひだが黄土色を呈する点、などテングタケの中でも特異的な形態をもつ。

【分布】1962 年にマレーシアで新種として記載された。沖縄・西日本（鹿児島・鳥取）のシイ・カシ林、新潟のミズナラ林からの記録が知られ、熱帯から日本のブナ科樹林に連続して分布している「東南アジア要素」。



【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 33 件の発生記録があり、7 ～ 10 月にかけて市原市民の森、君津市豊英、東大千葉演習林（君津市）、印旛郡栄町（房総のむら）等での発生が知られている。

【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】Corner and Bas 1962 ／本郷 1987a ／吹春ほか 1995 ／吹春 1998c, 2019

（吹春俊光）

C　ナガエノホコリタケ　ハラタケ目・ハラタケ科

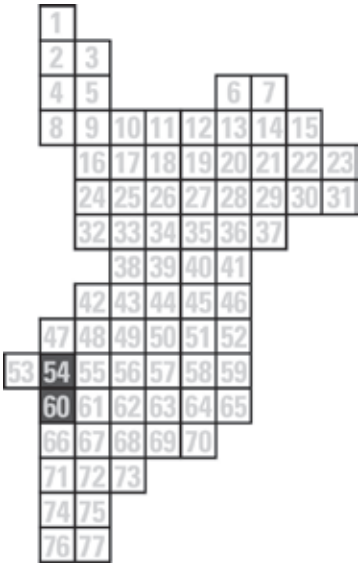
2009	C
2017	C
2023	C

Tulostoma fimbriatum Fr.

【種の特性】砂浜自然海岸依存種。海岸クロマツ林のより海側、コウボウムギなどが生える場所に発生する。子実体は幼時地中生で類球形。成熟すると柄部が伸長し、頭部と柄の上部が地表に出る。頭部は径 10 ～ 25mm、柄は 20 ～ 100 × 3 ～ 8mm。殻皮は 2 層、外皮は灰褐色～赤褐色、砂粒を巻き込み、頭部下側などに襟状に残る。柄は赤褐色で鱗片状。海浜砂地や草の茂った砂地にみられる。

【分布】日本（本州、四国、九州）。アフリカ、北米、欧州、ロシア、中国。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内からは富津市富津と新舞子浜の 2 地点 6 件の記録がある。2003 年になり発生が知られるようになった種であるが、発生環境が知られていなかったために記録がなかったものと思われる。生育依存環境である自然な海浜砂地は急激に減少しており、発生環境の調査が必要である。



【保護対策】本種が生育を依存する自然で砂浜海岸は、人為開発・砂の減少などにより現在急速に減少している。砂質の自然海岸を良好な状態で保存し保護していくことが本種の保護のために必要である。

【文 献】伊藤 1959 ／ Wright 1987 ／吉見 1989 ／浅井 2008

（吹春俊光）

C　ウネミケシボウズタケ　ハラタケ目・ハラタケ科

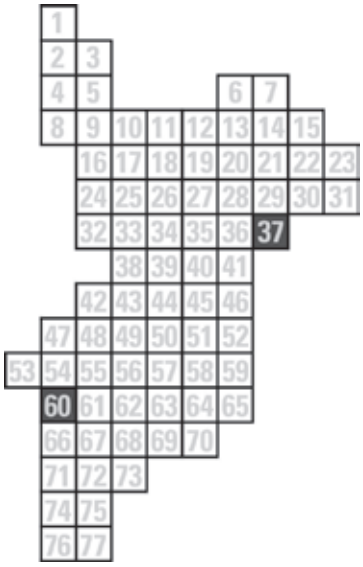
2009	C
2017	C
2023	C

Tulostoma striatum G.Cunn.Ortiz

【種の特性】砂浜自然海岸依存種。海岸クロマツ林のより海側、コウボウムギなどが生える場所に発生する。子実体は幼時地中生で類球形。成熟すると柄が伸長し、頭部と柄の上部が地表に出る。頭部は径 8 ～ 16mm、柄は 25 ～ 50 × 2 ～ 5mm。殻皮は 2 層、外皮は砂粒を巻き込み、頭部下側に房飾状に残る。内皮は平滑で肌色。孔口はやや乳頭状に隆起する。胞子表面に明瞭に隆起した肋骨状の刻紋をもつ。

【分布】日本（本州、北海道）。北米、南米、豪州、西アフリカ。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、山武市（旧:蓮沼村）、匝瑳市（旧:匝瑳郡野栄町）、富津市の 3 地点 9 件の記録がある。2000 年になり発生が知られるようになった種であるが、発生環境が知られていなかったために記録がなかったものと思われる。生育依存環境である自然な海浜砂地は急激に減少しており、発生環境の調査が必要である。



【保護対策】本種が生育を依存する自然で砂浜海岸は、人為開発・砂の減少などにより現在急速に減少している。砂質の自然海岸を良好な状態で保存し保護していくことが本種の保護のために必要である。

【文献】Wright 1987 ／浅井 2004, 2008 ／池田 2005 ／竹橋ほか 2012

（吹春俊光）

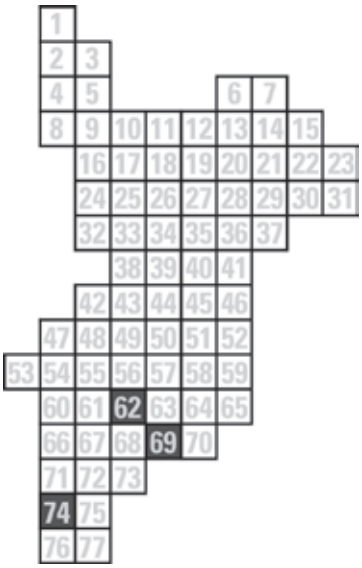
C　ヤコウタケ　ハラタケ目・クヌギタケ科

2009	A-B
2017	A-B
2023	C

Mycena chlorophos (Berk. & M.A.Curtis) Sacc.

【種の特性】熱帯要素。子実体に発光性がある点、柄の根元に基盤とよばれる吸盤状のもので基物に付着する点に特徴があり、タケ、ヤシ、その他種々の樹木の枯幹・落枝に発生する木材腐朽菌。幼菌はほぼ球形、傘は開けば径 7 ～ 27mm、湿時には放射状条線があり強い粘性がある。柄は 1 ～ 2.3mm x1 ～ 2mm、軟骨質、基部には径 2 ～ 4mm の円形の基盤があり、吸盤状。ひだの発光は強く、昼間でも薄暗いところでその発光を認めることができる。類似の菌にキュウバンタケがあるが、柄の基部において基盤の表面に放射状の条線を持つ点で本種と異なる。

【分布】日本（関東以西の太平洋側、小笠原諸島）。台湾、ミクロネシア、ポリネシア、ジャワ島、セイロン島。



【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 3 地点 10 件の発生記録がある（館山市・鴨川市・君津市［東京大学千葉演習林］）。湿潤で温度が高い夏の時期、現在発生が確認されている環境と類似の場所各地で発生している可能性がある。

【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】本郷 1987a ／吹春 1996 ／吹春ほか 1995

（吹春俊光）

C　スナジクズタケ　ハラタケ目・ナヨタケ科

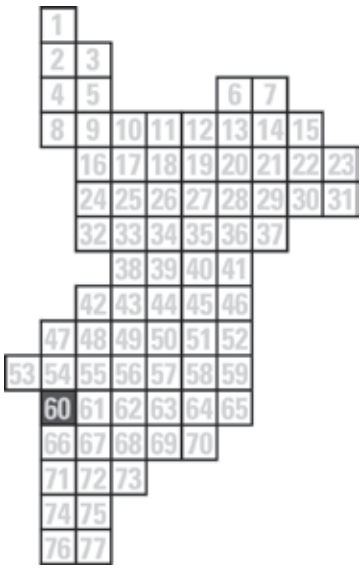
2009	
2017	C
2023	C

Psathyrella ammophila (Durieu & Lév.) P.D. Orton

【種の特性】砂質の砂浜自然海岸依存種。傘は径 1.5-4cm，表面は繊維質、赤みを帯びた褐色、縁には消失性の被膜をもつ。ヒダは紫褐色に成熟する、柄は 4-7cm × 2-3mm。コウボウムギが生育する地帯よりも海側に、11 月から 12 月にかけて単生～散生する。生育依存環境である自然で良好な海浜砂地の減少や環境の悪化に伴い、潜在的な発生環境が減少していると思われる。なお砂質海岸にみられるスナジクズタケと称されるものについては形態的に類似する複数種がみられる可能性があるという（竹橋ほか 2012）。

【分布】日本、欧州。

【県内の状況】中央博物館に保管されている標本と情報はすべて富津市新舞子浜 1 地点のもの 4 件である。生育依存環境である自然で良好な海浜砂地の減少や環境の悪化に伴い、潜在的な発生環境が減少していると思われる。



【保護対策】本種が生育を依存する自然な砂浜海岸は、人為開発・砂の減少などにより現在急速に減少している。砂質の自然海岸を良好な状態で保存し保護していくことが本種の保護のために必要である。

【 文 献 】Kits van Waveren E1977, 1985 ／竹橋・星野・糟谷 2012 ／山 本 2017 ／ Wächter and Melzer 2020 ／吹春 2022b

（吹春俊光）

C　オオヤシャイグチ　イグチ目・イグチ科

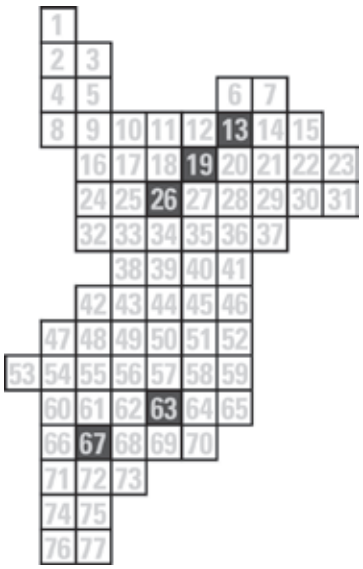
2009	D
2017	D
2023	C

Austroboletus subvirens (Hongo) Wolfe

【種の特性】ブナ科（シイ・カシ類）と共生する外生菌根菌。傘表面がやや緑色を帯び、柄の上部から下部全体に著しい網目を有する点が著しい特徴である。ヤシャイグチよりも子実体がより大きく、全体に緑色を帯びる点で異なる。

【分布】日本（関東以西）。ニューギニアなど、東アジアのシイ・カシ林に分布する「東南アジア要素」。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内に 5 地点 9 件の発生記録があり、南房総市（旧 : 安房郡丸山町）石堂寺のシイ・カシ林、大多喜町のスダジイ林、成田市（旧 : 大栄町）のシイ・カシ林、印旛郡栄町の県立房総のむら、佐倉市城址公園 のシイ林などに、7 月から 10 月にかけて発生する。



【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】長沢 1987 ／吹春ほか 1995 ／腰野 1997b ／吹春 1998c

（吹春俊光）

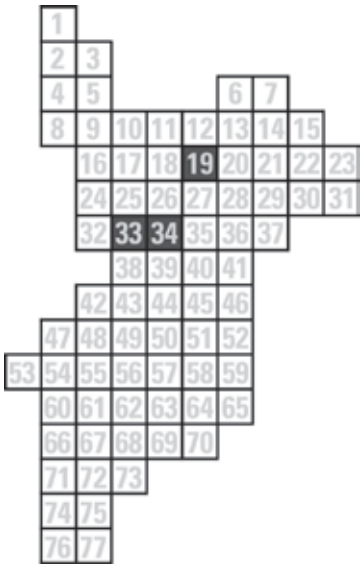
C　ザイモクイグチ　イグチ目・イグチ科

2009	D
2017	D
2023	C

Buchwaldoboletus pseudolignicola (Neda) Both & B. Ortiz

【種の特性】日本で記載された当初、マツの切り株などから発生する特徴から、外生菌根性のイグチの中にあって木材腐朽性持つと考えられ、その意味での和名であったが、近年の研究で本属が帰属するコショウイグチの系統は菌寄生性であることが明らかにされており（Nuhn et al 2013）、本種も木材腐朽菌に寄生する菌寄生性の菌である可能性がある。子実体表面は平滑で肉は空気に触れると青変する。

【分布】日本。茨城県つくば市内のマツの鋸屑が堆積した場所から発生したものが 1987 年に新種として記載された希産種。全国的な発生状況や分布は不明。



【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 5 地点 11 件の発生記録があり、印旛郡栄町の房総風土記の丘、千葉市若葉区加曾利貝塚公園、千葉市稲毛区園生市民の森などに 9 月下旬～ 10 月にかけて、アカマツの切り株などに発生する。

【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】Neda et al. 1987 ／吹春 ほ か 1995 ／ 吹 春 1998c., 2022a ／ Nuhn et al 2013.

（吹春俊光）

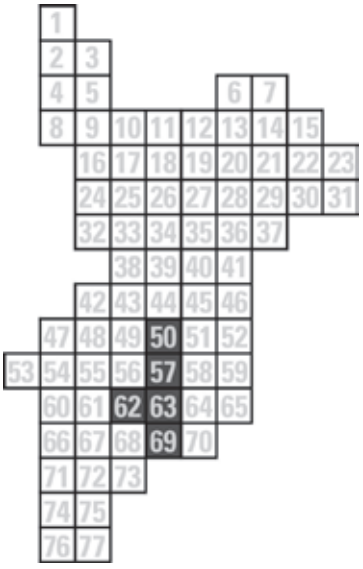
C　ベニイグチ　イグチ目・イグチ科

2009	D
2017	D
2023	C

Heimioporus japonicus (Hongo) E.Horak

【種の特性】ブナ科（シイ・カシ類）と共生する外生菌根菌。夏から秋に発生。柄に彫りの深い明瞭で特徴的な網目をもち、子実体全体が鮮やかな紅色である点が著しい特徴である。担子胞子の表面にも深い孔が多数みられる特徴的な胞子形態をもつ。福島以南の西日本のシイ・カシ林に発生する外生菌根菌。本属の日本産種は 1 種のみ。最初 Heimiella 属とされたが、その後、属そのものが Heimioporus 属にうつされた（Horak 2004）。

【分布】日本（福島以南の西日本のシイ・カシ林）。豪州東海岸（Halling & Fechner 2011）。本属には約 20 種が知られており、東アジア、ニューギニア、ボルネオ、中米・北米などの熱帯低地のブナ科やフタバガキ科林にみられる（Horak 2004）。



【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 19 件の記録があり、長生郡（長柄町, 笠森寺）, 市原市（市民の森, 大福山）, 君津市（豊英島、東大演習林）, 鴨川市（東大演習林）などのシイ・カシ林に 7 月から 10 月にかけて発生する。

【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】吹春ほか 1995.

（吹春俊光）

C　ホオベニシロアシイグチ　イグチ目・イグチ科

2009	D
2017	D
2023	C

Pseudoaustroboletus valens (Corner) Y.C. Li & Zhu L.Yang.

【種の特性】ブナ科（シイ・カシ類、コナラ等）と共生する大型の外生菌根菌。傘は径 5.5-13.5cm、表面は灰褐色。管孔や孔口は初め白色、のちピンク色を帯び、ついには灰橙色となり、この色の特徴が和名「ほおべに」の由来である。柄は 7-15 × 1-4cm、下方に向かって膨らみ、表面には非常に隆起した網目模様を持つ。この点が本種の著しい特徴である。肉は酸味を帯び食用となる。

【分布】日本（本州～九州）。シンガポール、マレーシア、ボルネオなど。東アジアのシイ・カシ林に分布する東南アジア要素。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内からは 38 件の発生記録があり、印旛郡栄町房総のむら、千葉市泉自然公園等のシイ・カシ林やコナラの雑木林などに 9 月下旬～ 10 月にかけて発生する。ブナ科の依存種なのだが、県内の発生状況をみると、ムラサキヤマドリタケのように、北総の平地に位置する公園など、やや人為環境のつよい林によく発生し、より自然に近い清澄山などで発生がみられない点、などに発生環境の特徴がある。

【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】長沢 1989 ／吹春ほか 1995 ／吹春 1996, 2020 ／ Li Y.C. et al 2014

（吹春俊光）

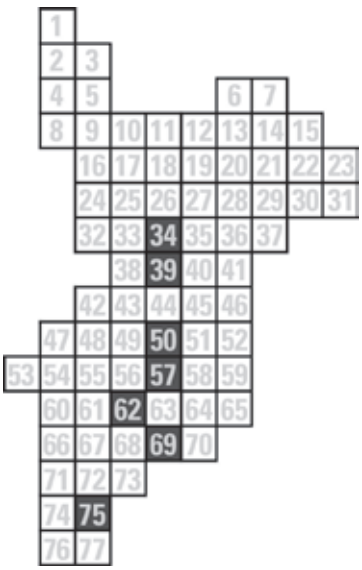
C　ルリハツタケ　ベニタケ目・ベニタケ科

2009	D
2017	D
2023	C

Lactarius subindigo Verbeken & E. Horak

【種の特性】ブナ科（シイ・カシ類・コナラ等）と共生する外生菌根菌。ハツタケに似るが全体が鮮やかな藍青色で、傘の表面には環紋をあらわし、乳液も藍色であるという著しい特徴を持つ。従来北米産 *Lactarius indigo* と同定され、北米東部との共通分布種と考えられてきたが、近年の研究により日本産は北米産のものと顕微鏡形態が異なりニューギニアのシイ属やマテバシイ属の林で記載された種（Verbeken and Horak 2000）と同種であるとされるようになり、分子系統でも支持されている（Nuytinck and Verbeken 2007）。県内では食用とされている。

【分布】日本（本州・四国・九州・屋久島）。インド、中国、ニューギニア。



【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 17 件の記録があり、館山市、君津市、市原市などのブナ科シイ・カシ林、マテバシイ林、コナラ林等の林に 9-10 月頃発生する。やや希。

【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】本郷 1989 ／吹春ほか 1995 ／ 吹 春 1996 ／ Verbeken and Horak 2000 ／ Nuytinck and Verbeken 2007

（吹春俊光）

C　アンドンタケ　スッポンタケ目・スッポンタケ科

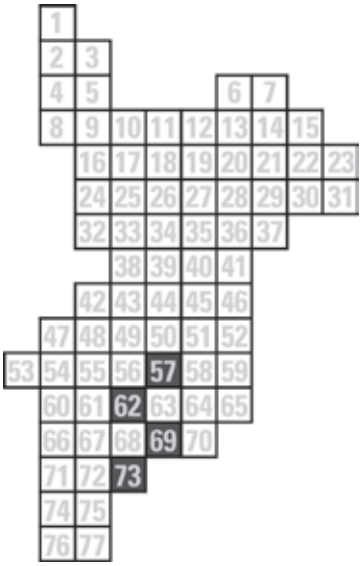
2009	A-B
2017	A-B
2023	C

Clathrus ruber P. Micheli ex Pers. f. *kusanoi* Kobayasi

【種の特性】子実体は最初類球形、表面には亀甲状の溝線をもち、成熟すると外皮が破れ、托枝（腕）を伸ばし籠の目状の子実体をつくるが、托枝はすぐに裂開し、腕が外屈した状態となる。腐生性。元東大農学部教授であった草野俊助が 1928 年 7 月 28 日に清澄山で、また小林義雄が東京都高尾山で採集した標本をもとに、小林義雄がアカカゴタケの品種として記載した。アカカゴタケ（*Clathrus ruber*）は托枝が形成する籠目の数が 10 箇以上（通常 20 箇程度）、10 箇以下のものをアンドンタケとして区別した（小林 1938）。分子系統によればアカカゴタケとは完全に別種であるという。

【分布】日本（東京・千葉・静岡・愛知）。

【県内の状況】本品種の基準標本産地は鴨川市清澄山（小林 1938）。その後、千葉県立中央博物館の記録として、基準産地付近（東大演習林、君津市折木沢）で再度発生が確認され（井口 1992）、南房総市（旧安房郡和田町：吹春 1999b）や君津市怒田沢（2016 年）で目撃情報があり、2014 年に市原市民の森で採集され、その後基準産地の東大演習林（鴨川市）で 2018 年頃から連続して発生が確認されており（村川・尾崎 2020）、県内の既知産地は 5 地点である。



【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】川村 1933 ／小林 1938 ／井口 1992 ／吹春 1999b ／吹春ほか 2002 ／村川・尾崎 2020

（吹春俊光）

C　キヌガサタケ　スッポンタケ目・スッポンタケ科

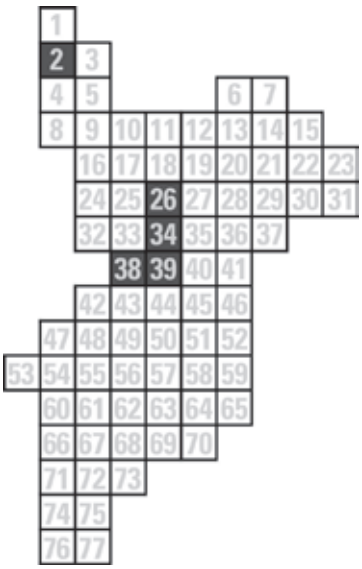
2009	C
2017	C
2023	C

Phallus indusiatus Vent.

【種の特性】主に竹林に梅雨と秋に発生する腐生菌。幼菌は白色の卵形。成熟すると殻皮が裂開し、中から托とよばれる円柱形のものが伸長し、その上部に基本体（胞子を含んだ臭気のある粘液）を載せたキャップ状の傘が付属する。全体はスッポンタケ様の子実体だが、傘の下から白いレース状の菌網を伸長させ柄全体がおおわれる、という著しい特徴を持つ。

【分布】日本。中国、北米、オーストラリアなど熱帯を中心に分布。特に竹林によく発生する。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内からは 12 件の記録があり、香取市（腰野 1997a）、市原市（林 1999）、佐倉市（吹春公子 2007）などからの発生が知られている。県内からは近縁のアカダマキヌガサタケも報告されており、ともに希産種である。



【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】吉見 1989 ／吹春ほか 1995 ／腰野 1997a ／林 1999 ／吹春・腰野 2000 ／吹春 2005c ／吹春公子 2007

（吹春俊光）

C　アカダマキヌガサタケ　スッポンタケ目・スッポンタケ科

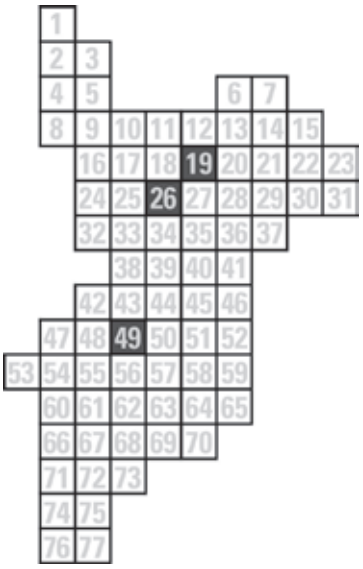
2009	
2017	C
2023	C

Phallus rubrovolvatus (M. Zang, D.G. Ji & X.X. Liu) Kreisel

【種の特性】これまで形態的に類似するキヌガサタケと混同されてきたが、幼菌を包む殻皮外層が帯褐暗赤色～暗赤紫色、菌網の網目がより粗雑という形態的な特徴で区別される。タケ・ササ類（ハチク，モウソウチク，アズマネザサなど）の植生と関連して見られることが多く、千葉県では夏と秋に発生する。

【分布】日本。中国。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、佐倉市・君津市・成田市など 4 地点から、6-7 月、9-10 月に発生した 18 件の記録がある。



【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】糟谷・竹橋・山上 2007 ／吹春公子 2007, 2008

（吹春俊光）

D　バカマツタケ　ハラタケ目・キシメジ科

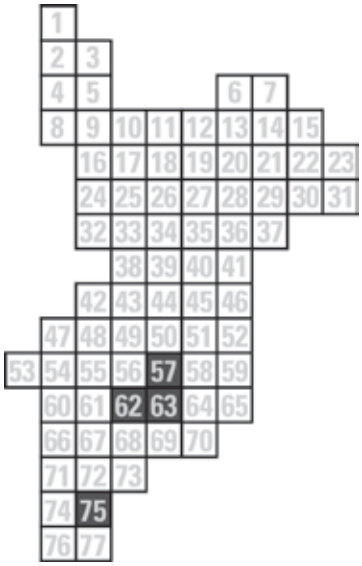
Tricholoma bakamatsutake Hongo

2009	D
2017	D
2023	D

【種の特性】ブナ科（シイ・カシ類・コナラ等）と共生する外生菌根菌。マツタケの近縁種で、マツタケがマツ科と外生菌根をつくることに対して、本種はブナ科と外生菌根をつくる点で異なる。傘は径 4～10cm、柄は 6～10 x 12～16mm、傘や柄の表面はマツタケに類似するが、色はやや薄く黄色味を帯び、子実体はより小型、香り成分のケイ皮酸メチルの量はマツタケの 3 倍以上（楠田 2019）、などの点で異なる。千葉県では 10 月初旬頃を中心に発生。優秀な食用菌。和名は津軽地方の方言。

【分布】日本。中国（雲南）、ニューギニア。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として県内から 57 件の記録がある。広く房総半島南部のコナラ林、スダジイ林、マテバシイ林などブナ科樹林内で発生する。千葉県の森林研究センターにより、発生状況や発生環境などについて詳しく研究された。2011 年の震災以前は勝浦の朝市でニセマツタケとともにマツタケの名称で販売されていた。優秀な食用菌。



【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】本郷 1987a ／ Terashima et al 1993 ／寺 嶋 1996, 1997 ／寺 嶋・富谷 2000 ／吹春ほか 1995,2002 ／吹春 1998c, 2000b,2005b, c, 2008, 2009a ／ Aoki et al 2022

（吹春俊光）

D　シモコシ　ハラタケ目・キシメジ科

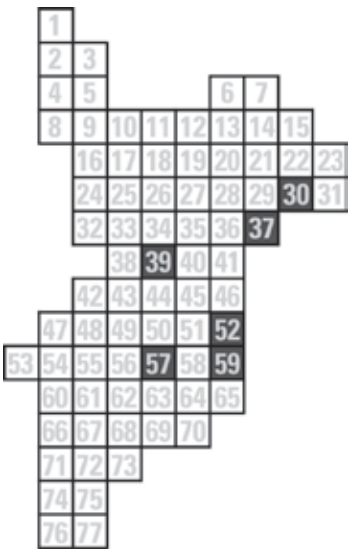
Tricholoma equestre (L.) P. Kumm.

2009	D
2017	D
2023	D

【種の特性】マツ科（クロマツなど）と共生する外生菌根菌。房総では「浜の金茸」（白土 1987）と称され、「木枯らしの吹き始める 11 月の半ばから 12 月いっぱい、海岸の防風林（松林）には黄金色のシモコシが発生する」（白土 1987）として、海岸のクロマツ林内に霜が下りる晩秋に発生する食用菌として古くから親しまれてきた。従来、日本のマツ林に見られるシモコシは *T. auratum* とされ、広葉樹林に見られるキシメジ *T. flavovirens* と、形態的・生態的・味覚的に区別されてきたが（本郷 1987a）、現在では、ともに *T. equestre* とされるようになった。また、欧州で *T. equestre* による中毒が報告されたことから（Laubner and Mikulevičiene 2016）、「シモコシ」や「キシメジ」は図鑑等で「要注意菌・毒菌」とされるようになった。しかしながら現在でも日本の「シモコシ」は食用として利用されていることもあり、日本産黄色系キシメジ類の分類学的整理が待望される。

【分布】北半球一帯。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内ではシモコシとして 19 件、キシメジとして 21 件の発生記録がある。今回地図に図示したものは「シモコシ」として記録にあるもの。シモコシはクロマツの海岸林などに 11～12 月頃発生する。



【保護対策】本種が菌根共生するマツは、江戸時代頃から房総では卓越する植生であったが（吹春 2021a）、現在では海岸や内陸ともに減少・消滅しつつある林である。現在でもマツ林は海岸等の防砂林・公園林として有効・活用可能な林であるため、マツ林の健全な育成をはかることにより、マツ類と共生する本種のような外生菌根菌の生育環境を守ることができる。

【文献】本郷 1987a ／白土 1987 ／吹春ほか 1995 ／ 吹春 1998c, 2000a, 2005c ／ Laubner and Mikulevičiene 2016

（吹春俊光）

D　ハマシメジ　ハラタケ目・キシメジ科

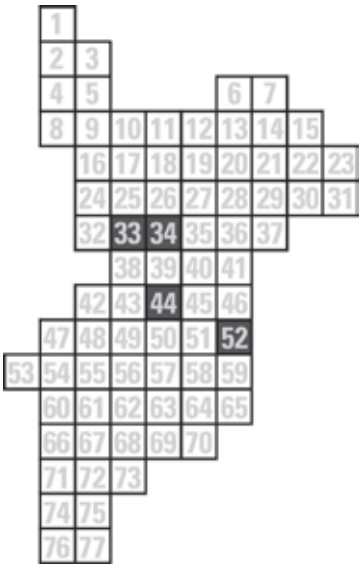
Tricholoma terreum (Schaeff.) P. Kumm.

2009	D
2017	D
2023	D

【種の特性】マツ科（クロマツなど）と共生する外生菌根菌。傘の径は 2～4cm、傘表面には淡灰色の繊維状～綿毛状の細かい鱗片がある。柄は白色～淡灰色。海岸の植栽された 20 年生くらいのクロマツ林に 10 月の終わりから 11 月にかけて発生する。千葉県では海岸に発生する本種をクロハマあるいは銀茸と称し食用として利用してきたという（白土 1987）。これまでクマシメジ *T. terreum* とハマシメジ *T. myomyces* は区別されてきたが現在では同じ学名でよばれている.

【分布】日本。北半球、豪州、ニュージーランド。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 25 件の発生記録がある。砂質・貧栄養の 20～30 年生のクロマツ林に生じ、内陸の公園や東京湾岸の埋め立て地に植栽されたマツ林などにもよく発生する。



【保護対策】本種が菌根共生するマツは、江戸時代頃から房総では卓越する植生であったが（吹春 2021a）、現在では海岸や内陸ともに減少・消滅しつつある林である。現在でもマツ林は海岸等の防砂林・公園林として有効・活用可能な林であるため、マツ林の健全な育成をはかることにより、マツ類と共生する本種のような外生菌根菌の生育環境を守ることができる。

【文献】本郷 1987a ／白土 1987 ／吹春 1998c, 2004a, 2005b, c ／吹春ほか 2002

（吹春俊光）

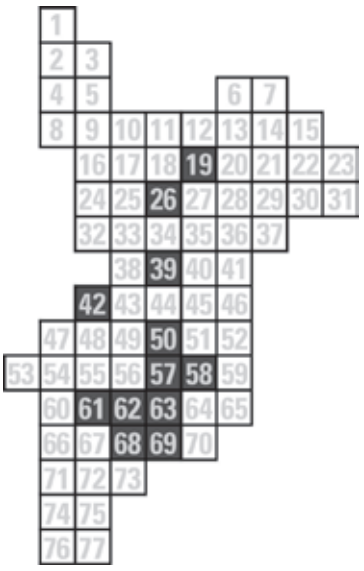
D　シロテングタケ　ハラタケ目・テングタケ科

Amanita neo-ovoidea Hongo

2009	D
2017	D
2023	D

【種の特性】ブナ科（シイ・カシ類）と共生する外生菌根菌。夏～秋。傘は 7.5～10cm で白色、表面は白色の粉状物でおおわれ、さらに淡黄土色で大型・膜質の外被膜の名残が見られ、また縁部にも内被膜の名残が垂れ下がる。柄は 11-13cm × 12-15mm，表面は粉状～綿屑状、基部にはつぼとして大型で膜質の外被膜が残存する。有毒。

【分布】日本（本州以南）。中国、ネパール、大韓民国（Cui et al 2018）。1975 年に日本で新種記載された種。日本及び中国南部のブナ科の林（シイ・カシ林、コナラ林）に連続して分布する「東南アジア要素」。



【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 52 件の発生記録があり、君津市、印旛郡栄町（房総のむら）、市原市（市原市民の森）、夷隅町、長南町、千葉市（泉自然公園）などに、10 月上旬～11 月上旬に発生する。

【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】本郷 1987a ／吹春ほか 1995 ／吹春 1998c, 2005b, 2020 ／ Adhikari 2000 ／ Cui et. al. 2018

（吹春俊光）

D　ウスキテングタケ　ハラタケ目・テングタケ科

2009	D
2017	D
2023	D

Amanita orientigemmata Zhu L. Yang & Yoshim. Doi

【種の特性】ブナ科（コナラなど）と共生する外生菌根菌。傘が淡黄色～淡黄土色の種で傘表面には外被膜の名残として白色のつぼの破片が散在する。傘は径約 7cm の中型、テングタケ節に属する。従来、欧州との共通種 *Amanita genmmata* とされてきたが、近年アジア固有の種として記載された（Yang and Doi 1999）。有毒。

【分布】日本（関東以西）。中国、インド。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 73 件の発生記録がある。1990 年代までは発生が珍しかったが、2000 年代以降、県内では比較的広くみられるようになった。

【保護対策】県内では主に里山とよばれるコナラの里山林によく発生するが、里山は過去の産業構造と人の暮らしがもたらした消滅しつつある人為環境であるため、人為的にコナラ雑木林の維持管理を継続する場所をつくり、里山的なコナラ雑木林と共に保護する必要がある。

【文献】本郷 1987a ／吹春ほか 1995 ／吹春 1998c, 2005b ／ Yang and Doi 1999

（吹春俊光）

D　オニフウセンタケ　ハラタケ目・フウセンタケ科

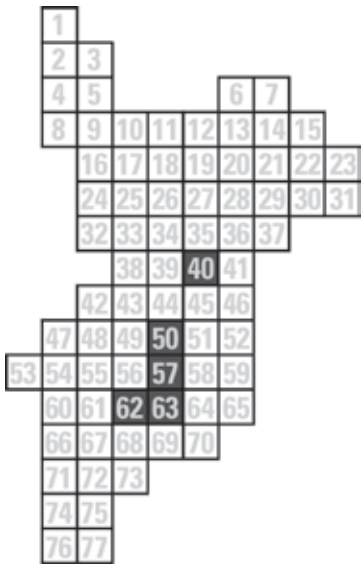
2009	D
2017	D
2023	D

Cortinarius nigrosquamosus Hongo

【種の特性】ブナ科（シイ・カシ類・コナラ等）と共生する外生菌根菌。傘の淡黄色の地に特徴的な黒い刺状の鱗片を有する点、また柄の被膜より下部に傘と同様の黒色の鱗片を備える点、胞子が類球形である点など、フウセンタケ属の中で際だった特異な特色をもつ。

【分布】関東地方以西。滋賀県 (アカマツ・コナラ林)・兵庫県 (クヌギ林) で発見され 1969 年に新種記載され、のち記載者本人によりニューギニア中央高地のシイ属とコナラ属が混じる林で採集された。「東南アジア要素」。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 43 件の発生記録があり、君津市（清和県民の森、東大演習林）、市原市（鶴舞、市原市民の森）、千葉市（昭和の森）などのシイ・カシ林やコナラ林で 10 月頃に採集されている。



【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】本郷 1987b ／吹春ほか 1995 ／吹春 1996, 2005c, 2019

（吹春俊光）

D　ヒロハシデチチタケ　ベニタケ目・ベニタケ科

2009	D
2017	D
2023	D

Lactarius circellatus Fr. f. *distantifolius* Hongo

【種の特性】房総の里山（イヌシデ・コナラ林）に発生しクマシデ属（イヌシデ）と共生する外生菌根菌。大型のチチタケ属の種類でひだが疎である点が特徴。基本種は欧州に産しひだが密に配列する。本種は本リストに挙げたスミゾメヤマイグチと並んでクマシデ属と共生するシデ林に特徴的な種。県内の谷津地形の場所に見られるイヌシデが混じる里山林を象徴し代表する種。

【分布】日本。京都で記載された種で、例えば関西ではブナ帯よりやや標高の低いシデ・コナラ林帯で見られる。日本及びその周辺のクマシデ属の林に発生していると思われる。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 34 件の記録があり、北総の谷津の周辺に見られるイヌシデ・コナラの里山の雑木林に、5 月から 10 月頃まで発生する。県内におけるイヌシデ・コナラの里山林を特徴づける典型的な種である。

【保護対策】生県内では主に里山とよばれるイヌシデが混じる里山林によく発生するが、里山は過去の産業構造と人の暮らしがもたらした消滅しつつある人為環境であるため、イヌシデが混じる里山林の維持管理を人為的に継続する場所をつくり、里山林と共に保護する必要がある。

【文献】本郷 1989 ／吹春ほか 1995 ／吹春 1998a, 2018

（吹春俊光）

D　アシナガイグチ　イグチ目・イグチ科

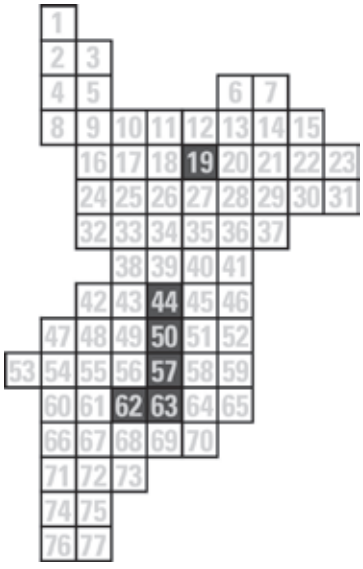
2009	D
2017	D
2023	D

Boletellus elatus Nagas.

【種の特性】ブナ科（シイ・カシ類）と共生する外生菌根菌。夏～秋。やや小形の傘（3-9cm）に細く長い柄（10-23cm）を持つ点が最大の形態的特徴。担子胞子には、縦の溝状の特徴的な溝線がみられる。

【分布】日本（本州・九州・沖縄）。アカマツ・コナラ林、シイ・カシ林に発生する種として 1985 年に新種記載された。国外における分布は不明であるが「東南アジア要素」の可能性がある。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 28 件の記録があり、印旛郡栄町（房総のむら）、市原市、君津市（東大演習林、豊英島）、長生郡長南町などのシイ・カシ林で 、8 ～ 10 月に採集されている。県内では食材とされる場合もある。



【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】長沢 1987 ／吹春ほか 1995 ／吹春 1998c, 2005b, c

（吹春俊光）

D　ムラサキヤマドリタケ　イグチ目・イグチ科

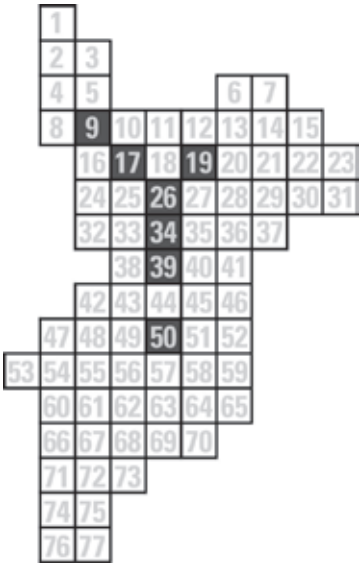
Boletus violaceofuscus W.F.Chiu

2009	D
2017	D
2023	D

種の特性】ブナ科（シイ・カシ類・コナラ等）と共生する外生菌根菌。夏～秋。傘は幼時全面紫色だが、しばしば黄色と紫のまだら模様となる。柄は紫色で表面には明瞭な網目模様がある。全体が紫色のイグチであるという点でイグチ類の中でも際だった特色を持つ。県内ではイグチ類の中で最も美味とされている。中国南部で採集されたものが乾物として輸出され欧州で食用として利用されているという。

【分布】日本（北海道～九州）。中国、台湾、韓国。おそらく「東南アジア要素」。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 51 件の発生記録があり、野田市、柏市など県内北部の公園内のシイ・カシ林、栄町、千葉市の公園など平地のシイ・カシ林やコナラ林に発生する。シイ・カシ林やコナラ林などにみられブナ科の依存種なのだが、県内の発生状況をみると、ホオベニシロアシイグチと同様、北総の平地に位置する公園など、やや人為環境のつよい林によく発生し、より自然に近い清澄山などで発生がみられない点、などに発生環境の特徴がある。県内では食材として人気がある。



【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】長沢 1989 ／吹春ほか 1995 ／吹春 1996, 1998c, 2020

（吹春俊光）

D　スミゾメヤマイグチ　イグチ目・イグチ科

Leccinellum griseum (Quél.) Bresinsky & Manfr. Binder

2009	D
2017	D
2023	D

【種の特性】房総の里山（イヌシデ・コナラ林）に発生しクマシデ属（イヌシデ）と共生する外生菌根菌。傘の表面に凹凸状のシワがあり、柄の表面には黒い鱗片を有し、子実体の肉の色が空気に触れると黒変する（スミゾメ）という際だった特徴を持つ。欧州で記載された種で、日本産は 2 胞子性である点で異なり、分類的には検討が必要である。本種は本リストに挙げたヒロハシデチチタケと並んでクマシデ属と共生するシデ林に特徴的な種。県内の谷津地形の場所に見られるイヌシデが混じる里山林を象徴し代表する種。

【分布】日本（基本種は欧州、北米東部等）。例えば関西ではブナ帯よりやや標高の低いシデ・コナラ林帯で見られる。日本産と同様の種類（ヒダが粗）が周辺のアジア地域にも発生していると思われる。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 105 件の発生記録があり、イヌシデと共生する外生菌根菌として北総の谷津の周辺のイヌシデ・コナラの里山林に 7 月上旬～ 10 月上旬に発生する。

【保護対策】生県内では主に里山とよばれるイヌシデが混じる里山林によく発生するが、里山は過去の産業構造と人の暮らしがもたらした消滅しつつある人為環境であるため、イヌシデが混じる里山林の維持管理を人為的に継続する場所をつくり、里山林と共に保護する必要がある。

【文献】長沢 1989 ／吹春ほか 1995 ／吹春 1996, 2005b, 2018

（吹春俊光）

D　ショウロ　イグチ目・ショウロ科

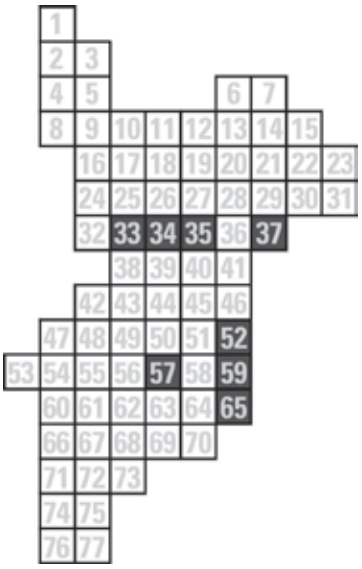
Rhizopogon roseolus (Corda) Th. Fr.

2009	D
2017	D
2023	D

【種の特性】房総の里山林（アカマツ）や海岸林（クロマツ）に発生しマツ類と共生する外生菌根菌。イグチ類のアミタケと生態的にも系統的にも類似する。球形の子実体をつくる。同属の類似種とは殻皮の厚さ、変色性、色などで、また担子胞子の担子器上の生じ方などで区別する。

【分布】日本。北半球一帯。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 56 件の発生記録があり、一宮町、山武市、いすみ市などの海岸クロマツ林に 5 ～ 7 月、また 10 ～ 11 月終わりまで生じる。昭和 30 年代まで、海岸のクロマツ林ばかりでなく内陸のマツ林にも普通に本種の発生が見られた（渡辺 1998）。また地域によっては季節になるとショウロ売りが各家を訪れるほどの（腰野 1994）普通種であり、江戸時代の図譜にも掲載されており、食用として古くから利用されてきた。マツ林が房総半島を広くおおっていた江戸時代から（吹春 2021a）房総では広く全域でみられた種と思われるが、現在ではマツ林の減少に伴い希な種となった。



【保護対策】県内では主に里山とよばれるアカマツ林によく発生するが、アカマツ林は過去の産業構造と人の暮らしがもたらした消滅しつつある人為環境であるため、アカマツ林の維持管理を人為的に継続する場所をつくり、マツの里山林と共に保護する必要がある。10 ～ 20 年生の若いマツ林に容易に発生がみられる種でもあることから、マツ類の植林と適切な林床管理により容易に発生させることができる。

【文献】吹春ほか 1995 ／腰野 1994 ／吹春 1996,2004a, 2005b, c, 2008, 2017, 2021a ／渡辺 1998

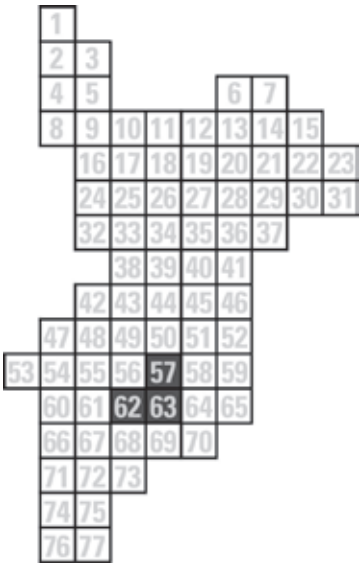
（吹春俊光）

D　コウタケ　イボタケ目・マツバハリタケ科

Sarcodon aspratus (Berk.) S.Ito

2009	D
2017	D
2023	D

【種の特性】ブナ科（シイ・カシ類・コナラ等）と共生する外生菌根菌。子実体はアサガオの花のような漏斗形にひらき、直径 20 ～ 30cm に達する。漏斗の内側には尖った鱗片を密生し、裏面の子実層は針状。乾燥すると強い香りがあり食用。広く北半球に分布するシシタケ *S. imbricatus* と同種とする説もあったが、子実体が大型で漏斗状の柄の基部まで中空という形態的特徴をもち、食用とされるものをコウタケとして、また分子系統的にもアジアに分布する別種として（Alfredo et al 2012）、区別されるようになった。



【分布】日本。アジア（韓国など）。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内では 16 件の記録があり、市原市、大多喜町、君津市などのシイ・カシ林やコナラの見られる尾根筋から斜面にかけて、10 月中旬頃に発生する。

【保護対策】生育地の林の状態と環境を、現状のまま維持・保全していくことが望ましい。

【文献】古川・今関 1989 ／吹春ほか 1995 ／吹春 2005b ／ Alfredo et al 2012

（吹春俊光）

D　ブクリョウ　タマチョレイタケ目・ツガサルノコシカケ科

Wolfiporia extensa (Peck) Ginns

2009	D
2017	D
2023	D

【種の特性】伐採後 3 ～ 6 年経過したマツの切り株の根（地中）に直径 30cm 以上、重量 1kg 以上にもなる球形の菌核をつくり、通常はこの菌核がブクリョウとよばれ、菌核の姿のほうがよく知られている。子実体は倒木上に生じる木材腐朽菌。紀元前に成立した『史記』にも登場する古くからの生薬。漢方名は「茯苓」。平安時代の『延喜式』には上総国から茯苓 28 斤、下総国からは茯苓 6 斤の表現が見られ、また江戸時代にも印旛郡の記録としてブクリョウ採りが農閑期の副業であった記録が残されており（松平 1989）, 房総には古くからマツ林が広がっていたことが伺える（吹春 2021a）。また地中に生じる大きな菌核を探索する道具として「ブクリョウ突き」という棒状のものが残されている（谷城 1988）。

【分布】北半球一帯。

【県内の状況】千葉県立中央博物館の記録として、県内から 10 件の記録がある。マツ林が房総半島を広くおおっていた江戸時代から（吹春 2021a）房総では広く全域でみられた種と思われるが、現在ではマツ林の減少に伴い希な種となった。

【保護対策】本種が発生するマツ林は、江戸時代頃から房総では卓越する植生であったが（吹春 2021a）、現在では海岸や内陸ともに減少・消滅しつつある林である人為環境であるため、ブクリョウの発生環境が減少していくのもやむおえないかもしれない。

【文献】谷城 1988 ／ 松平 1989 ／吹春ほか 1995 ／吹春 2008, 2021a

（吹春俊光）